

昭和五十五年十一月十六日

郷土史資料

第一〇六回

史跡めぐり資料

下妻市地区

大宝八幡宮

多宝院・多賀谷氏の墓
多賀谷氏と城跡
光明院と親鸞聖人

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

第一〇六回 史跡めぐり案内

一、日

時

十一月十六日

日曜日

一、集

合

南越谷駅前

午前七時五十分
八時二十一分

乘車

船橋行

一、行

先

南越谷→新松戸

乗替→柏 快速乗替

取手

常総鐵道乗替

大宝駅 下車

大宝八幡宮 → 大宝城跡

多宝院 → 多賀谷氏の墓→城の遺構

多賀谷城跡 → 多賀谷城跡公園

光明寺 → 親鸞御手植菩提樹→とけ無しヒイラギ大樹

一、帰路

一、会費

一、金式千九百円也、

但し、曼食は各自持参の事。

や　れ　だ　い　こ

お　才

花なる人の　こひしとて

月に泣いたは　夢なるもの

女男居てさへ　筑波の山は

霧がかかれば　寂しいもの

たてほころびし　ころも手に

涙のあと　しるくとも

佐渡の小鳥の　夕波千鳥

彌彦の嵐の　寒からむ

うきよにあさき　我なれば
君もさのみは　とがめまじ

越後出てから　常陸まで

泣きにはるばる　来はせねど

花なる人の　恋しとて

月に泣いたは　夢なるもの

お月様さへ　十三七ッ

お父と恋ふるが　無理かえな

つらけれど　紅葉綾なす　葦穂ろの

麓に今は　帰らうよ

(以下略)

夜　雨　作詩

破れ太鼓は　叩けども

落る涙を　知るや君

夜　雨　作詩

広い常緑平野のなかにある下妻市は、豊かな水と緑の野山に恵まれてゐるので、

農業を中心として発達しましたが

市街地を中心として商業・工業な

たは周辺の野鳥たちの水場やえさ場としてもたいせつなものです。
常緑地方は暖帯に属し、照葉樹林帯に当るわけですが、神社やお寺の境内や屋敷林などに、カシ類を中心としたそのおもかけを残しています。このような落ち着いた森は、この地方の気候や風土に適した植物であり、祖先の長い経験から生まれた、すばらしい知恵の結晶と思われます。

沼　闇東口一ム層におおむねた平らな地形で、畠・山林・市街地として利用されています。鬼怒川・小貝川辺は沖積層で一層低くなっています。おもに水田に利用されています。

奈良時代の「常陸風土記」には、
當陸の国は面積がひろく、土地が
あまねく、うるおい、野がよく見えているから開墾に適した土地が多く、また山と
海の産物にとんで、民家はみな富みさかえている、という意味のことが書かれてい
ます。

また市の南は、下総の國に屬していたわけですが、古くからアサの栽培などが行われたらしく、昔の豊田郡^{古事記}の北部を占めているのです。

小貝川辺の水田地帯は、「常陸風土記」の勝波の江^{かわ}であり、「万葉集」と氣

「卷九の高橋忠率昌歌集」での「島羽の淡薄」の遺跡であるのです。大宝沼や江沼が、水を濁していたのはそう古いことではありません。江運用水の砂沼は、風光明媚とはゆかないでしょうけれども、渡り鳥の飛来地として、ま



として、市の文化財に指定されましたが、私たちの祖先が、七〇〇年もの長い年月の間、「御神木」、「御手植の樹」と敬い守り育ててきた、挽まぬ愛護の結果であつたので、このまも



約一万年前、石器だけを用いる人々が下妻にも住みはじめ、やがて温暖な縄文時代に

城跡は、有楽海が進入し、石器とともに土器を使う人々が、多く住むようになりました。

縄文時代の末には、寒冷となつて海は退き、住む人々も少なくなりました。少し温くなつた弥生・古墳時代から奈良時代には、鬼怒川は毛野川といわれ、下妻の南部を東流し、一帯に高みの土地が生まれ、低湿地は鳥羽淡海となりました。

毛野川や鳥羽淡海ぞいの沃土には、はじめて水田が開かれ、ずっと多くの人々が住むようになりました。やがて水利のよい平方や加賀などに桑里制がしかれ、黒豹や高道組などに古墳を築いた豪族たちの土地・人民は、公地・公民として朝廷の支配に属することになりました。

江戸時代、はじめはほとんど代官が、やがて一七二二年（正徳二）一万石の井上氏を迎えたが、下妻に再び勢いをもたらしたのは鬼怒川です。幕府の政策で、利根川を通じて江戸川と結びつけられた鬼怒川は、交通の大動脈となり、大きな用水渠がしを控えた下妻は、経済・文化の先進地となりました。

明治初年、飯村丈三郎らの同舟社が核となつて、県内の民権家による国会開設運動が進められ、一万人都こえる精強著名の大半を占めた下妻地方は、有数な民選運動地として全國的にも知られました。

また、水戸・土浦と並んで、県文部・裁判所・警察署などの官衙が、やがて中

学校「現下妻一高」がおかれた下妻は、名実ともに県西における政治・経済・文化の中心になりました。

しかし、鉄道時代を迎えた明治中ごろの一八八九年（明治二二）、小山・下館間に水戸線が開通すると、鬼怒川を上下する帆かけ舟は少なくなり、索道がしあびれるばかりで、下妻はだんだん勢を失つてしましました。

こうして、かつて進歩的といわれた下妻は、過去の榮光を追う保守的な町となり、戦後は人口も減少し、県西の谷間などと称されました。だが、今や人口増加へと転じてきたのです。これは若い人たちが緑と太陽がいっぱい、しかも心の豊かな町づくりに打診むよになつたからです。（矢中英吉）

朝廷から派遣された役人の中には、水田を開いて、莊園とし、公地も合わせ、豪族として勢力を伸ばさうとする者もいました。その莊園をめぐる争いが、平将門の乱の原因の一つといわれ、下妻もししば戦場となりました。

この争いに勝った平貞盛の一族は、やがて豪族大株氏として、肥沃な下津真庄をはじめ、各地に莊園を広げ、要害に館（城）を築いて、他の豪族からの攻撃に備えました。なお、その保護を求めて、中央有力者に莊園を寄進し、領主と仰きました。

京都から新潟へ流されていた親鸞が、やがて許され、一二一四年（建保二）妻子を連れ、はるばる下妻へ、やすらぎの地を求めてやつて来たのは、莊園関係で交流があり、下妻の人々の温い心が、通じていたからだともいわれます。

南北朝時代、関城・大宝城・駒城の兵士が、北朝の大軍を相手に、南朝の命運をかけて何年にもわたって、戦史に残るようなはげしい戦ひを続けたのも、やはり、莊園関係で南朝方と、強いつながりがあつたればこそといわれています。

戦国時代、結城から進出した多賀谷氏は、新たに城を築き、大きと穀倉地帯に領地を広げ、重慶の代に六万石の大名となり、下妻の發展のもとをつくりました。しかし、一六〇一年（慶長六）家康の命で、七代にわたる多賀谷氏の幕は閉ざされ、下妻は勢を失いました。

大宝八幡神社



大宝八幡神社は、社伝によると、大宝元年藤原時忠が常陸國河内郡へ下向の時、筑紫の宇佐八幡宮を勧請創立したと伝えています。「吾妻鏡」に下妻宮とあるのは、同社であります。本殿は天正三年焼失、同年下妻城主多賀谷下總守尊經再建、旧時の社殿に復しました。この建物は三間社流造という、極めて簡素な、桃山時代の地方色の濃い建物であります。

〔第二区〕嘉慶元年丁卯十一月十三日

開山石室鑿成記

當代住持碑

享徳五年（実は康正二年）は私年号で、足利幕府に從わないあさしに用いた珍しい年号です。この梵鐘は天正元年九月佐竹氏の先手となつた多賀谷重經が猿島郡へ出陣の際の戦利品を大宝八幡神社へ献納したもので記録や社伝などでわかります。

なお、この梵鐘は撞く度にぶるさと懸してから、「あなたへ恋し」と鳴り渡るといわれ地元の古老はあなべ恋しのつりがねと伝えていました。

〔第三区〕大槻郡藤原中務政行
〔以下略〕慶雲寺住持比丘至光

小谷野三良左衛門尉季公

奉行 背木左近将藍題

染屋山城守修理助義次
道井尾帳守沙野常宗

〔第四区〕下州上幸崎郡穴太邊

星智寺推銘

開山僧律師隆選

住持阿闍梨慈翁

吉

享徳五年丙子七月十六日

この陰刻鎌にこゝで、鐘は石室鑿成開山になる埼玉県岩槻市平林寺の

嘉慶元年（天正鉄道のものであることがわかる。平林寺はのち、同県新

座市腎火止に移った名刹である。ただし、鐘は享徳五年（康正二年）鎧空

鐵島郡星智寺のものとなつたことと三区以下の追銘のとおりである。星智

寺の旧址はわからない。また第一区三行目の「平林禪寺」の四字は削除されていてもが數かにみえる。追銘時の所為であろう。鐘はのち多賀谷氏

によって大安八幡神社に移されたと伝えられる。

銅鐘 この鐘は、通高二八・一、口径六〇・三、各セントメートル。四段四列の乳と二か所の撞座をもつ普通の梵鐘であるが、池の間（鐘の中間にあるならば方形の四区）に、次の銘文があつて名高い。

〔第一区〕大日本國武藏州崎西縣鶴江鄉

金童村金鳳山平林禪寺造禁

衆禮縁金工鐘大鐘所集殊歎

上報四恩下資三有法界群生

俱福利益者也謹為銘曰

乾寧模範 青石音聲 築之朋友

扣之則鳴 地雷震々 天樂響々

覺長夜夢 静靜無情 懷施增福

義規大行 皇基永固 佛日榮明

瑞花雙鳥八稜鏡

県指定文化財 下妻市大室 大室八幡宮

瑞花雙鳥文 白銅製 伝世古 径一二センチ



外区の四方に蝶を配

し、その間に唐草文様

を鋲出す。

組は輪宝座（または複合四葉寫座組）で左
右に瑞鳥を配し、空間
に瑞花をあらわす。國
柄は精緻をきわめ、豈
麗で保存はよい。源
時代の作であります。

が多い。それは鏡のうつ神怪から、神仙と鏡に、惡をのぞき、病をな
おす力があると信じたあらわれでもある。

奈良時代の唐鏡から平安時代後期の藤原鏡へと鏡の様式が変化する過
程に、中間形式ともいえる唐式鏡とよばれる鏡がある。上の瑞花双鳳八
稜鏡がこれに相当する。奈良時代の鏡には、海獸葡萄鏡、海螺鏡、瑞花
双鳳鏡など、さまざまな文様がみられるが、その多くは平安時代の鏡背
文様にほとんど影響をあたえることなく消えてゆく。そのなかで唐花双
鳳鏡だけが平安時代までのこり瑞花双鳳鏡や瑞花鶴金鏡をうむので
ある。すなむち唐花双鳳鏡の唐花が瑞花にかわり、双翼が鳳凰や鸞鷺と
交替して、和様化してゆく。さらに瑞花双鳳鏡にみられる瑞花が、やが
て山吹、薄、萩、菊、松、桜、葵、楓といったわが国の自然風物にみら
れる草花や樹木とかわり、鳳凰などが鶴、千鳥、雁、雀、鳩長鳥といっ
た親しみやすい鳥と交替して、完全に和様化された藤原鏡が完成する。
この鏡は、径一二センチメートル、白銅製。文様表出のよい精良
な一面である。鏡背文様は四分割して、上下に瑞花を散らし、左右に鳳
凰を対称的に配し、さらに周囲には羽をひろげた蝶を四方に対称的にお
き、そのあいだに唐草を散らしている。铸造年代は十一世紀頃であろう。
大室八幡神社の御神宝としてまことにふさわしい。

瑞花双鳳八稜鏡

県指定文化財 下妻市大室 大室八幡宮

日本の中には、様式的にみると、古墳時代を中心とする
漢式鏡の時代、飛鳥・奈良時代から平安時代前期までの唐式鏡の時代、
平安時代後期から江戸時代までの和鏡の時代に大別ができる。
そして鏡の臺に鋲出された文様は、当時の人々の趣好を鏡的にしめし、
鏡をみるとことによって、その時代の日本人が、鏡にたいしてどのような
意識をもっていたかを想像することができる。古代、中世の鏡は、神宝
であつたり、社寺に奉納されたり、あるいは墓塔などから出土すること

丸木舟

県指定文化財 下妻市大室 大室八幡宮

「うつろ舟」の名で社宝になつています。

これは江戸時代の中ごろ、大室沼平野に際して発見され、わが国の史書に初め

て記された出土例として知られています。

長さ六・〇七メートル、幅五五・〇センチで、船頭の高さが二五・〇センチ、船首部の高さ三一・〇センチあります。

材質はクロマツで、船底は平坦に近い造りであり、舷の内外とも精巧に彫られていることが特色になってます。大木の幹をくり抜いて造った丸木舟は、刳舟「くりぶね」ともいわれ、縄文時代には石舟で、弥生・古墳時代になると铁斧で仕上げるようになりました。

み」とな通りのこの丸木舟は、古墳時代後期（約一三〇〇年前）のものと考えられ、ほぼ完全な形であり、保存が極めて良好であるので、貴重な考古資料として高く評価されています。



二 南北朝動乱と下妻地方

1 下妻と北島親房

親房の東國下向 延元三・曆応元年(一二九〇)九月初旬、北島親房、伊達行朝らの一行は、南朝勢力の劣勢を挽回する目的をおひて、伊勢の大義を常陸へ向けて船出した。当時は南北朝の動乱期にあたり、両勢力は各地で戦闘をくりひろげていた。親房はこうした情勢下にあって、なぜ常陸入国をほたす必要があったのであろうか。

このことは、南朝勢力の地方經營再建政策と関連する。楠木正成、北島親房の子の頭家、新田義貞らの戦死にともなう南朝勢力の退潮が続くながで、南朝方は卷返しきはかる必要にせまられていた。こうした情況下にあって、後醍醐天皇は、南朝勢力の結集をはからうと、奥州、関東、東海、四国、九州などの地方に、皇子や重臣たちを下向させていった。奥州へは、去る元弘三・正慶元年(一二九〇)十月に、護良親王の弟である義良親王、陸奥守頭家らが派遣され、また親房も同行し、奥州での南朝方拠点の確立をはかっていた。しかし、足利方に味方する奥州武士も多く、思うにまかせない状況であった。こうした中にあって、延元三・曆応元年十月に、奥州に入った義良親王、頭家の弟である頭信らは、奥州から関東にかけての有力武士や地頭、豪族等を尋ねて勢力を擴張し、奥州を南朝方の全國的勢力拡大のための根據地にしようとした。常陸に入つて、南方よりこの計画を実現しようとした親房は、常陸の小田治久、下野の小山朝郷、白河の結城宗広の子親朝、それに笠山の南朝勢を結集すれば、幕府勢力と対抗でき、ひいては奥州を中心として関東に

およぶ地域を南朝方の勢力下におくことができるのみに違いない。

こうした構想をもって、延元三・暦応元年(1330)九月に東条浦に漂着した親房は、小田治久、関宗祐、下妻改泰らに迎えられ、神宮寺城に入つた。しかし、北朝方の佐竹、大掾、畠田諸氏らの執拗な攻撃をうけ、阿波崎城を経て小田城へと逃れざるをえなかつた。親房の入国にもかかわらず、彼に味方する豪族は少数であつた。常陸平氏諸流の多くは、積極的に南朝方に味方するところか、むしろ北朝方についていた。ところが、かつて八条院領であった田中荘、真壁部の一部地域、同院領であつたとみられる下妻荘などは、前述した「下妻地方の荘」でも触れたようだ。

大覺寺統領であつたと思われる。親房はこの地に、蓮花心院領であつた関荘を加えた常陸西部地域にねらいを定めて入国したと推察できる。こうした動向に加え、平安時代以来、在地に土着し、所領への執着を旺盛にしてきた東国武士にあって、動乱をさらに複雑なものにしていったものに、この頃から、この地方でようやく一般化しつつあつた惣領、庶子の対立があげられる。小山、結城、白河結城諸氏や真壁氏、下河辺一族などの場合は、一門が両勢力にわかれて対戦していった。白河結城宗広は、建武元年(1334)一月に、結城氏惣領の地位を後醍醐天皇から与えられたが、これを不服とした結城氏は、足利方勢力に味方せざるを得なかつた。また関氏は、この結城氏と所領を接していたが、建武二年(1335)、恩賞として尊氏から結城氏に給与された関荘をめぐって、結城氏と対立せざるを得ないという具合であつた。結城氏は桐ヶ瀬に支城を築き、これが後の関城攻防の際、北朝方の拠点となるのであつた。

こうした惣領と庶子の対立や所領をめぐる複雑な対立抗争が続いていたため、白河結城、関、下妻、真壁などの諸氏は、南朝方が不利な情勢になつても、容易に離れられなかつたのである。

親房の東国経路 小田城に入った親房は、常陸西部の南朝方拠点を中心として、積極的に南朝勢力の再建をはかつた。彼はまず、常陸の武士を味方につけ、さらに奥州の武士とも連絡をとろうとした。親房は、南朝方の中心的な武将であった白河結城宗広の子である親朝に、来援のための朝下を促していくのはこのためであつた。

延元四・暦応二年(1335)二月に、親房の一族の春日頭國は、親房を援助するために小田城に入った。これに力を得た常陸の南朝勢は、下野の宇都宮氏、鷹山氏らの北朝勢を攻め破つていった。また、興國元・暦応三年(1336)六月には、陸奥鎮守府將軍の北畠顕信が小田城に入つた。北畠父子は、常陸から奥州にかけての地域の掌握をかかり、当時、北朝方の手にあつた多賀國府を奪回するため、緻密な戦略をねりあげた。親房はこの計画を達成するためにも、南朝勢力を統合し、陸奥への路を開く必要にかられたのである。

これより先の延元四・暦応二年(1335)秋に、親房は後村上天皇の教育のために『神皇正統記』を著わし、翌年の二月には『職原抄』を完成させていた。中央から遠く離れた小田城での執筆は、さぞ困難なことが多かつたであろうと思われるが、この地は水路を通じて中央の情報が比較的入りやすかつたのではあるまい。鎌倉後期には、伊勢と東國とを結ぶ廻船の往来がみられており、太平洋から利根川を経て霞ヶ浦に入り、さらに筑波川を通りて小田に達するというコースをとれば、吉野と小田城との連絡は、主に水路を通じて可

能であったと考えられる。筑波川は今日の桜川にあたり、小規模な河川であるが、当時としては水路として利用できたのではないかと思われる。小田城での親房は、前記した『神皇正統記』でも述べている執筆内容を東国武士に説いていたと考えられる。しかし、所領確保や勢力拡張に关心を抱いていた彼らには、親房の考えに必ずしも共鳴できなかつた。

度々難題となつてゐる
直家はあくまで豊臣を主
いわゆる福一とす
さうり化方延喜と立派
算定方を考へるのみで本業
王

北島親房書状



北島親房画像

のではなかろうか。当時、東国武士の中には、争乱を切りぬけようと、本領安堵や官職の要求を親房や吉野朝にせまる者もいたのである。親房はこれに対し、官位や諸職などは給与されるものであつて、要求すべきものではない旨を強調し、理論で武士を説き伏せようとした。こうした親房の地方情勢への対応の仕方は、東国武士を組織化するのに役立つどころか、かえつて北朝方へ味方させる原因ともなり、足利方の攻勢を強化させる結果となつていつたのである。

2 両勢力の攻防

関・大宝両城の戦い 常陸での親房を中心とした南朝方の活動に対し、北朝方は延元四・暦応二年(1355)、高師直の従兄弟である師冬を下向させた。武藏、相模の軍勢を率いた師冬は、十一月にかけて、関宗祐らと関館、駒館、下妻の山河、結城辺で対戦し、南朝勢の討滅をめざした。興國元・暦応三年五月に、師冬は再びこれら南朝勢と対戦したが、戦況を有利な方向へ導けずに、古河、宇都宮をへて、十一月には瓜連に進出した。親房は、親朝や小山朝輝、常陸平氏らに出兵を促し、多珂郡下の諸豪族らの力を借りて、師冬を攻めようとした。しかし軍勢を結集できずに、結局、失敗をおわった。

興國三・暦応四年(1356)五月に入ると、師冬は瓜連を出発し、南下を開始した。こうした北朝勢の常陸攻略に対抗して、親房は親朝に援軍を要請し、師冬との対戦に備えていた。しかし奥州の南朝勢は、来援のための気配はみせずに沈黙を守っていた。おそらく奥州の南朝勢も、奥州北朝勢の動向にも注意を払わねばならず、苦境に立たされていたと考えられる。だが、師冬を中心とした常陸の北朝勢は、こうした南朝勢の停滯の間をういて、大掾高幹に命じて南郡の志氣城を攻めさせ、さらに小田城をも攻略させた。北朝勢の進攻は急で、小田氏の所領のうち、北郡、田中荘はその支配下に入り、九月には、信太莊佐倉、東条、龜谷など、南朝方の諸城を攻撃していく。

親房は十月に、南朝勢の東条、下妻、長沼諸氏の中で背叛者が相次いでいる旨や、小田城に変心する者がいる旨を親朝に報じていることから、常陸南朝勢の中で動搖がおこっていたことがわかる。しかし、親朝から援軍は到着せず、十一月には常陸での南朝方の中心人物であった小田

治久も、師冬の攻撃のまえに降伏した。結局、親房は関宗祐の関城に、春日頼国は下妻政泰の大宝城にそれぞれ移らざるをえなかつた。こうして、関・大宝両城を中心とした戦いへと移行していくわけであるが、戦況は南朝方に有利ではなくなってきたのである。

親房と頼国がそれぞれ関城、大宝城に入城してからの興國二・暦応四年(1356)十二月に、師冬は大宝沼の東側に兵を進め、両城間の連絡を断ち切り、孤立化をはかる戦法をとろうとした。こうした北朝勢の作戦に対し、頼国は大宝城より打って出て、北朝勢を撃破し、また関城の南朝勢も夜陰に乗じて師冬の陣を襲うなど、抗争は激化していく。

興國三・康永元年に入ると、師冬軍の攻撃は激しさを増し、関・大宝両城間の大宝沼を通じての連絡提携は、次第に困難となつた。三、四月には、北朝方で信濃から来援した小笠原貞宗は、市河親房らを味方につけ大宝城を攻め、また、五、六、八、九月には師冬軍は関城を攻め続けた。十一月の親房から親朝へ送られた手紙にもあるように、関城で戦っている南朝勢の兵が、飢えと寒さから戦意が次第に喪失していく様子がわかり、なお一層の援助を親朝に望んだのであった。

争乱は、興國四・康永二年に入つてもなお続き、四月には頼国が関城を援け、北朝勢の結城直朝や佐竹一族などと対戦した。また、同月に南朝方の真壁幹重は、親朝へ援助を求めていた。五月に入ると、親房は関城の兵糧が乏しくなったことを親朝に報じた。

しかし八月に入ると、親房の再三再四の出兵要請に対しても、何とかく気配をみせなかつた親朝は、親房らの期待を裏切つて、北朝方に味方した。経済的援助を断たれ、精神的支えを失つた常陸の南朝勢は、幕府方の本格的な援助をうけた師冬軍の攻撃の前に敗れ、関城の関宗祐・宗政父子、大宝城の下妻政泰らは討死したのであった。

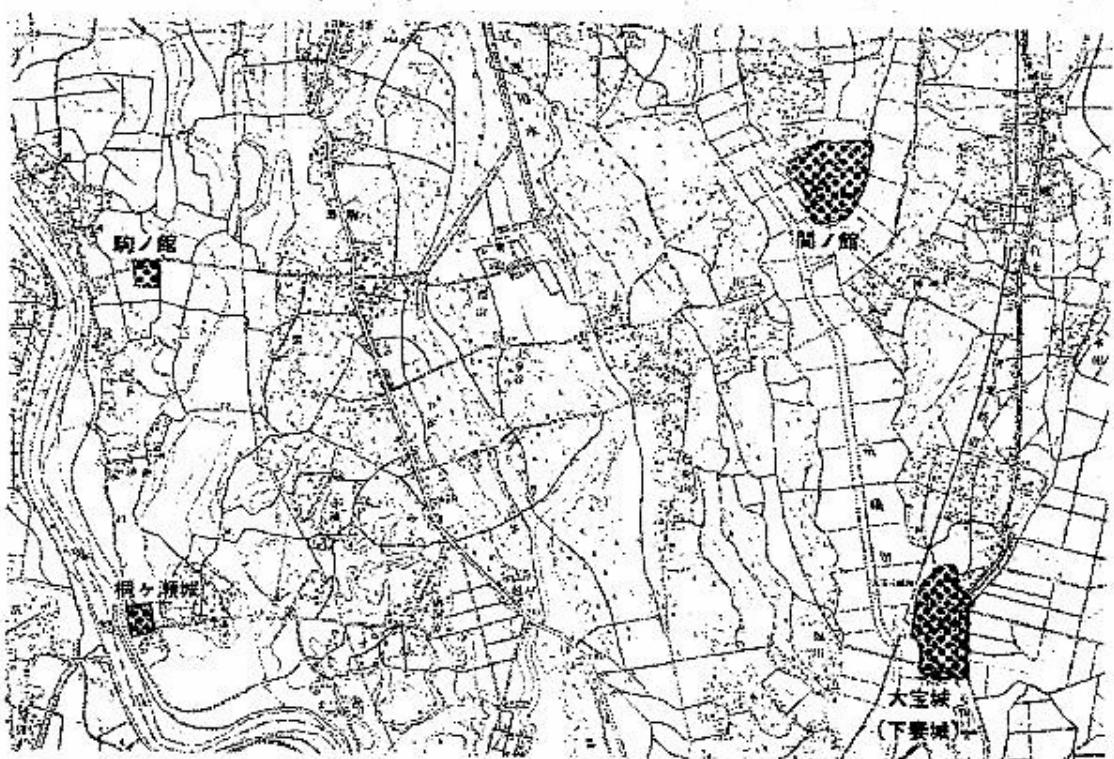
南朝勢力の後退

かつて八条院領であつて、大覺寺統の財源の一部となつてゐた時期があつたと考えられる田中莊、真壁郡の一部、下妻莊などの地域や蓮花心院領であった閑莊などの常陸西部の南朝方拠点のうち、常陸の南朝勢の最後の拠点であつた閑、大宝両城が北朝方の手に落ちると、親房らの奥州に南朝方の拠点を築いていこうとした構想は、事實上、崩壊していった。親房も、常陸での戦闘をこれ以上続けていこゝ事が困難となつたことを悟って、吉野へ戻つてゐた。また、伊佐城も落ち、ここに常陸における南北朝動乱は終息していったかにみえたが、春日顯國はその後も常陸にとどまり、抗戦を続けながら、南朝勢力の再建をはからうとしたが、結局、失敗におわつたのである。

この間、大宝両城の落城より少し以前の興国二・曆応四年(1342)ころ、南朝方にあって、主戦派の親房に批判的であつた前閑白の近衛經忠は、小山、小田両氏を味方につけ、親房とは別行動をとろうと企図した。親房の東国経略に不満をもつた武士たちが多くなつてきた段階での計画であつた。

また、親房の地位を否定する吉野からの使者である僧淨光が、小田城へ下向してきたのもこの年であつた。また、興国四・康永二年には、下野の小山朝郷は大宝城の興良親王(護良親王の子)を迎えて、自ら鎮守府將軍となつて、親房の徹底抗戦の構えに対抗しようとした。

こうした南朝方の内部での対立が露呈してきた段階で、南朝方の勝利は望めなくなつた。幕府軍の本格的な攻撃により、常陸の南朝勢方は完全にたたかれ、決定的な打撃をうけたのであつた。常陸西部の南朝方拠点は、北朝足利方の支配下に組み込まれ、やがて鎌倉府の影響下に入つていつたのである。



大宝城、閑館、駒ノ館、根ヶ森城の所在

大宝城

下妻市大宝町字本町

関東鉄道常緑線大宝駅の東、八幡神社境内にある。平野部の丘陵の一角落に築かれた平城

で東西三百八十八メートル、南北五百七十六メートルあり、南に追手があり、東に堀手があり、北は断崖をな

し、南北朝争乱のころは地下に大宝湖が開け、地続きの平地とは

堀切りで遮断し、北方は沼を挟んで閑城と対していた。沼には明治末年まで満々たる水を蓄えていたが、現在は幹地整理により干涸となり、城は本丸跡、大手門跡、土塁の一部などがわずかに面影を残しているのみである。

小山氏の一族下妻修理権利民政が、貞永元年（一一三二）より居城し、攻めまで在城したが、それ以前にも古城を修築した記録がある。南北朝争乱に際して、城主下妻政泰は南朝に属し、延喜四年（一一四一）十一月、北朝親王が小田原から閑城に移り、同時に吉野朝廷から新常陸國司に任命された春日中将頼時は、若い興良親王を率いて大宝城に入城した。下妻政泰は、河口に宮方である閑城主宗祐、宗政父子と呼応して、足利勢力の覆滅を計ったが、城主政泰は著張のため宗院の間に主張派と和議派が対立し、ついに不平分子は城を去つたものいわゆる。その間、足利方の高師冬勢の攻撃はますます激しく繰り返され、城中は食糧の不足もはなはだしくなり、春日頼時は白河結城親王に手紙を送り、大宝城の危急を訴え、糧食と援軍の要請をしたが、すでに衰弱した親王は動かなかつた。そのうえ、閑、大宝両城は強力な敵の包囲下に水陸とも交



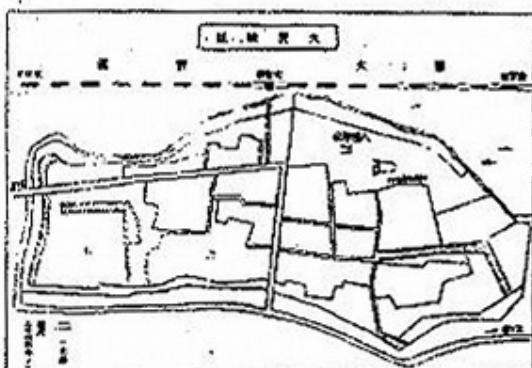
大宝城西面を望む（手前に元大宝跡）

地を越えて走り、ようやく船宿に乗り、舟によって駿河へ。通路を取つていたが、敵は大舟団を海上に浮かべて警戒を厳重にして、ため積立艦隊となり、城兵は迫る寒氣と食糧不足のため、ついに、二年後の康永三年（興國五年）十一月十二日に落城し、城主下妻政泰は自刃（自殺）した。

落城の際、春日中将頼時は城を逃れ、閑城を脱出した北朝親王ことともに吉野に引き揚げているが、一族の春日少将頼國と甥の吉野四郎は、家の子を一時當方に身を潜め、翌康永三年（興國五年）一二四四（一二四四）三月七日、敵兵を集めて大宝城を攻め取つたが、翌日は奪い返され、しかも身は駿兵の手に捕らわれて、九日斬殺されてしまった。

大宝城跡

春日町大宝、（一三五〇年）



南北朝時代の大宝城跡は、大宝八幡神社の境内にあります。当時は東西一八八メートル、南北五七六メートルで、北が本丸南は追手、東は堀手になっています。

西北は断崖をなし崖下に満々たる水を湛えた大宝湖が開け、北方は沼を挟んで閑城と対してました。

城主下妻政泰は南朝方に属し、春日中将頼時が護良親王の遺子興良親王を率いて大宝城に入城しました。政泰は閑城主宗祐、宗政父子と協力、足利勢力の覆滅を計りましたが、城闘は長びきしかも高師冬軍の水陸にわたる攻撃が甚だしいので外との連絡も断たれ、その上頼みの構の白河城主猪城親朝も安心し、遂に兵力、糧食の不足と迫る寒気のため、興國四年（一二四四）一月一二日落城、城主下妻政泰は討死しました。

關 城

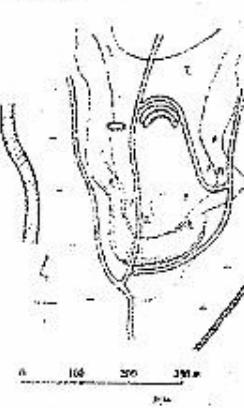
白鷹郡 佐喜良村御前山關原 五日坂
◎源義朝初制 水原の春 志士郎 美波

關城は、結城二代朝臣の田馬三郎朝泰が京守の所領の内園の庄を賜わり、館を築いて居館とし、地頭として下配したものである。南北朝争乱の折り、関氏は南朝に味方した。足利義氏は白河結城氏との連絡を断つよう、結城西朝に命じた。

直朝は兵を率いて攻めたが、北畠親房が小田城より移り城門にあつたので堅固で落とせず、親房は城内にあつて、『神皇正統記』を著した。結城内には武家方の将萬勝冬が指揮をとつていたが、直朝の攻城はかどらぬを刷ぎたので、直朝は道路の裏め細いのを知り、大室沿水路より攻めてひき、水上安全を握り、住吉神社に戰勝を願った。興國四年（康永三年十一月四日）四月三日城内櫓へ攻め込んだが、左腹に深創を負い、陣中まで引き揚げたが、その後さらに死んだという。草氏は蒲原田中莊（現佐和村）一千四歩を守えてこれを貢した。田中莊

直朝はこのとき十九歳、關城は小田氏の一族田中氏の所領であった。

城 関



この城には南北朝争乱のころ、中御門少将藤原実寛が居城し、興良親王を奉じた七畠親房に呼んで、義兵を挙げ、源義吉討した宮方の拠点であった。足利方の萬勝冬が来襲、駒城を攻めたが、城兵よく守り、落しなかったといつ。

しかし足利方は、その後も周辺に城砦を構え、駒城攻略の野望を捨てず、再び攻めている。ことに興國元年（1340）五月二十七日は、夜陰に来て急襲した。城兵よく防戦したが、ついに落城、城主中御門少将実寛は萬勝冬の軍に捕えられ、その後の消息は詳かない。

その後、宮方は決死で逆襲し、翌二十八日城の奪還に成功、その勢いに乗じ、周辺の敵城を屠り、ついに萬勝冬は駒城より古河方面に撤退している。興國二年十一月、北畠親房が關城に、春日御園が大室城に移る以前に、駒城は武家方の手中に落ちていて、

なお、城域より南東七百メートルほどの地点に十人塚と称するかなり大きな円墳があり、土地の人は駒城合戦の祭討死した武士を埋葬したと考している。

（早川与吉）

駒 城

下春田大字馬鹿子谷

駒城は、東西面二十メートル、南北面五十メートルと称せられ、東方に物見櫓跡がある。現在一部の雜木林は開闢され畑となり、城の中心と思われる地点を東西に市道が貫通している。

その道路の北側には、土塁が残り、その外側には空堀の跡がわざかに残る。

周囲の低地水田から見るとかなりの高台が築造されており、東、南、北は水田と化しているが、当時は沿路「ケト沼」その他の沼に囲まれ、西は鬼怒川に接続、さも黒駒河岸と呼ばれていたところがある。

多賀谷城本丸跡

(別名下妻城) 市指定史跡 下妻市本城町

多賀谷氏は、初代氏家が現在の多賀谷城公園の一郭に本丸を構え、隣園を築いて、その勢力を擴くほか、小田原北条氏政勢の再三の參入を撃退する等七代一四七年間下妻城主として常磐地方に栄えていました。

慶長五年間ヶ原の役が起り、七代重經は佐竹氏とともに西軍に心を寄せ、徳川

家康の再三の説いにも出でませんでした。

この役で家康に捕まれ、三成の党に与した理由

由で慶長六年（一六〇一）二月城主追放城破

却となり当地を去りました。城主追放のとき奥方始め姫奥女中達は行米を案してある者は

涼劍でのどを突き、ある者は館道に身を投げたが領民はこれを責め追体を集め三の丸の一画に合葬したのが口碑に名高い美女塚です。

現在本丸跡にある多賀谷氏遺跡碑は、旧主をしたう家臣子孫が明治十三年（一九〇〇）月に建立したものでした。



下妻城

①多賀谷城 ②下妻城 ③平野

上総介高望主の後裔、土浦城主常陸大掾早清時（のちの子）の子喜蔵は、嘉慶三年（一八〇六）西河内郡越戸のほか下の津を分けられ、城を築いて下津開城を称した。建久三年（一〇九二）西代邑部恵幹まで、百七年間当地を支配したが、代わって下野の小山朝政の領地となり、子忠長朝が貞永元年（一一三三）まで領した。それ以後、小山一族の下妻修業大夫長政が入城し、西代政泰まで居城して威を振るった。南北朝の争乱には南朝に属して小山、関らの諸侯とともに北条親房

兵を進めて下妻を押領し、城を侵襲して居住した。範遠の子忠範より城戸氏を称して三代続いた。市正元年（一二五三）、武州守王源義西の莊多賀谷邑に住んでいた金子十郎家忠の子孫多賀谷左近大利家は、古河公方足利義氏の命を奉じて上杉景忠の首級を奉びた。

功により、下妻の莊と開郡の一部を給せられ、下妻城を攻め落として入城した。代々多賀谷氏が居城したが、

氏家より次代政登の元龜年間（一五七〇—一七三）にその所領は十八万余石であり、天文年間（一五七三—一九二）には二十四万余石にのぼった。小山源征成の際には、豈忍秀吉に從つて功あり、四十万一千石に加増された。



下妻城の美女塚

を率いて敗った。嘉永二年（英治四年、一八四一）八月、北側方の高冬山を守護城を迎えて居城したが、同年十二月十一日、城主下妻政泰が討死して城は落した。

下妻城が攻撃すると、足利氏満に仕えていた第治平十郎紀連は、

より城戸氏を称して三代続いた。市正元年（一二五三）、武州守王源義西の莊多賀谷邑に住んでいた金子十郎家忠の子孫多賀谷左近大

利家は、古河公方足利義氏の命を奉じて上杉景忠の首級を奉びた。功により、下妻の莊と開郡の一部を給せられ、下妻城を攻め落として入城した。代々多賀谷氏が居城したが、氏家より次代政登の元龜年間（一五七〇—一七三）にその所領は十八万余石であり、天文年間（一五七三—一九二）には二十四万余石にのぼった。小山源征成の際には、豈忍秀吉に從つて功あり、四十万一千石に加増された。豊臣秀吉（一六〇〇）關ヶ原の合戦には、城主多賀谷修慶大夫重綱は佐竹氏とともに西軍に心を寄せ、徳川家康の再三の説いにも応ぜず固辞しなかった。そのため、慶長六年二月、徳川家の昌代將原式部大輔盛家（伊奈輝宗等も代らは、大軍を率いて下妻市南（現在の新潟市千代田区井手町）に来て多賀谷重綱を呼び出し、城主追放と城破令、名跡を剥ぐ旨を伝えた。重綱はその命に従い、江州彦根の井伊直政に預けられたが、元和四年（一六一八）十一月九日、六十歳で死去した。

多賀谷氏退転のとき、護元支中らは凌辱で喉を突き、そのまま城内の館沼に身を投げて朱に染めたという。その後、領民の手によりて遺体が集められ、三の丸の一画に合葬して美女塚と称している。

多賀谷氏滅亡後は、伊奈備前守忠次が当地の都代を務めたが、慶長十一年（一六〇六）より三年間は水戸城主西川頼房の領地となつた。それよりは、天領となつて代官が置かれた。

正徳三年（一七一三）三河国安藤正純の後胤である井上遠江守政長が、高一万石で当地に封ぜられて陣屋を構え、明治維新まで井上氏十四代が支配した。

常総線下妻駅の東方一キロにあって、土塁、空堀がわずかに面影を残している。大字沼は、佐音鳥羽の深海といわれた沼の一部が魚食む。

弘前北条氏政と不和成りければ、頼朝其妻あらふ事を恐れて八田知秀を遣して弘前を侵さしめ、其母を殺す。後是を小山長朝（朝政子）に継ぐ。子孫田口下妻を姓とす。其後、結城氏強盛にして下妻氏を併呑して、其後、多賀谷修理大夫を封じて結城に居らしむ。其後、多賀谷強佔して結城氏に服せず。永禄二年上杉輝勝が結城城を攻めしと圖へければ、結城主生を初と、小田原方の大名馳騒、守護しける時、多賀谷道心を企て杉方之諸将小田宇都宮佐竹那須と相談し、結城城へ寄ると沙汰しければ、翌年正月、結城晴朝は成氏に敵を乞て帰城し八千余騎にて待撃しに、小田佐竹小山下妻多賀谷等三方攻め。結城方には待撃たる事なれば力を奮て括き戦し程に、寄手打貫方々へ退散す。豊臣秀吉関東を打平

げし時、多賀谷宣景（佐竹義重子孫多賀谷氏）出て降り。慶長五年（一六〇〇）宣景石田三成に覺するを以て封除かる。十七年十一月、神祖・利房卿（初名西千代丸）此城に封す（食十万石）。後水戸に改封せ

る。「ひづ」

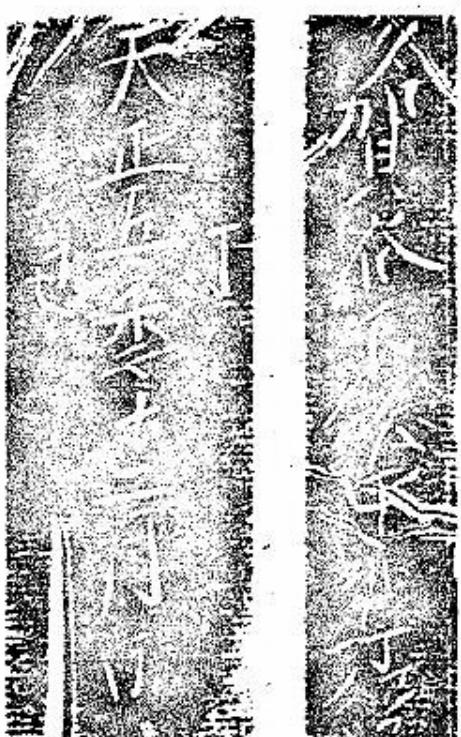
『説小説史』

美女塚は戦死者の塚か 多賀谷氏没落、城破却焼れ、美女投身焼死、美女塚築造という一連の落城悲話は、「常総誌略」（安永年間）（毛利頭）が初見であつて、それより古い数多の書物には、されにも美女塚の話は一言も書いてない。

徳川に反抗して戦った上杉の会津城も、上杉に援軍を出した佐竹の戸城も、破却されない。上杉、佐竹と氣脈を通じて、舉兵の機会を窺っていただけの多賀谷は、未遂犯であるから、城主以外は無罪であった。

多賀谷氏退転の五年後、家康の子頼房、その後孫忠昌（秀康の子）、さらには甥定綱（家康異父弟定勝の子）を封ずるほどいたいせつな城を、破却するはずがない。慶長十六年の「下妻城荒廃」に關しては一六六ページ参照。

やえに、美女たちの死はありえない。この塚は、永禄十一年の小田原北条氏米攻の時の、柳ノ下の激戦の戦死者の墓ではなかつたか。明治末年、県道新設工事で塚は崩され、出土した人骨は法泉寺に改葬された。



大宝八幡神社本殿勾欄宝珠的拓本

新編野与党

桓武天皇 —— 葛原親王 —— 高見王

平氏 村岡五郎 村岡二郎 武藏押領使下總介
村岡良文 忠頼 忠常

野与党祖 千葉小次郎四郎大夫 常將
野与庄司 常永 元宗 基永

野与庄司

千葉小次郎四郎大夫 周防八郎
常永 元宗 近永

野与庄司

大藏二郎 恒宗 大藏新大夫
経長 行長

季頼

助基

信基

恆永
歿死於奥州

道地法華坊
頼意

頼基

多賀谷
光基

時員 六郎 重光 五郎 久基 四郎 三郎 重基

重茂 重茂 弥五郎 景茂

某 三郎 弥一郎 某 太郎兵衛尉

多賀谷氏系圖

桓武平氏・武藏七党の内

基 永好与六郎 類楚道曾法華助 級基有智平太

多寶塔二郎
武陵回騎西歸

多智谷出版

多賀谷館

北埼玉郡駒込町内別ヶ谷

現在、大福寺という真言宗の寺のあるあたりを多賀谷筋跡といふが、いまは何も遺跡をとどめていない。多賀氏は遠久から嘉吉のころ（一四四一—一四三）まで、約二百五十年間この地の地頭としてここに住み、のち下總国の下妻へと移ったので館は既され、そのあと現在の大福寺が建てられたものと伝えられる（『北武八志』）。

——賴任村山賓津 賴家——家範(金子六郎) 家忠(子郎) 家政(多賀谷家相続)
一家政(右近門附) 大八(金子家忠子) (六代賜)——光義(源三郎) 大八(精蔵酒庄子) (多賀谷家相続)

某派太師 祭燒戰場村死

一氏家門主 家植夫高松二男 大通大太
下野守 妻 鈴木庄祐 家室 旗太郎 下野守
新経 下野守 稲城多賀谷田 関正昌 藤井タヌ出雲
紫利果子 稲城多賀田 二郎十郎

文選太廟饋疑
唐宋六大家
文選下卷
諸太師
徐陵元
書
大二郎
文選太廟饋疑

一經門 依弘光 不去城主
子孫允 疾經三株ナレル 一經伯 滅跋守 各田部城主
今玄蕃守
子孫陰山多喜二龍院守

一、重庆 乐山大佛
水各深重险
二、重慶 布雷大佛
安房
下坡
水各深重险

一女子山川始主山川終
終身妾後難別

一女子姓竹義堂妻秋田へ行ク

水太正殿主
秀班二徒平賀翁行者

忠縣之內 江州蓬萊井伊家二子
一女于晉書人正貞德妻秋江人行

肥州煙波六友閣門記

接、次兄若誠貞隆ノ家ヲ
モ危困及上

金子氏館

金子郷の名が史上にみえたのは鎌倉時代で、「吾妻鏡」寛喜二年六月の条に「貳國在行注申吉九日辰刻當國金子郷」とあり、寛喜二年（一二三〇）は金子家忠の子家祐の没年と當たる。

金子氏は武藏七党の一つで、家志の父村山家範が金子氏に住んで金子氏を名乗り、十郎家忠は保延四年（一一三八）に金子館^{アシカニ}を生まれた。

大福寺 北飾葛郡騎西町田ヶ谷内郷

新義真言宗、正能村龍花院末、熊野山弥陀院と号す。

境内の墓地に、

文永四年(一一六七)

上下欠 入道交名

文永七年(一一七〇)

略 完

弘安十一年

上下欠 主尊特殊

多賀谷館跡也。多賀谷氏は、建久(一一九〇)嘉吉(一四四三)迄の二百五十年間住、○下妻城に移る。

内田ヶ谷村は海上郡山根庄に属す。古は西田ヶ谷郷と唱へ、多賀谷氏住せしと云う。多賀谷氏は、按するに、武藏国埼玉郡多賀谷郷の人、左衛門尉家政は、金子十郎家忠が二男なり、勤め仁元年(一一九〇)頼経の隨兵たり。其子弥五郎重茂、宗尊親王に仕へ、康元を元年へ、建長三年(一二五一)御弓始めに仕へ、其の子五郎景茂、原五郎光義を聳となし、家を繼しむ。

頼嗣に仕へ、其の子五郎景茂、原五郎光義を聳となし、家を繼しむ。光義は、一二五六御弓始めに景茂、其の器に撰元を朝、下総國結城左衛門尉満廣と名乗る。谷内郷の古郷子、其の子、原五郎光義を聳となし、家を繼しむ。光義は、一二五六御弓始めに景茂、其の器に撰元を朝、下総國結城左衛門尉満廣と名乗る。

多賀谷氏家を始める。家臣隨ひ来る。此の頃頼基・多賀谷光国、内大福寺の記に、多賀谷氏下妻へ移りし時、後寛正年中取立、下妻城に住せしとみれば、此處より下妻に移りしと云は誤りなり。是等の人々も当地に住せし事知る。谷内郷の古郷子、其の子、原五郎光義を聳となし、家を繼しむ。光義は、一二五六御弓始めに景茂、其の器に撰元を朝、下総國結城左衛門尉満廣と名乗る。

多宝院 下妻市坂本
曹洞宗、結城乘國寺末、多賀谷家植の時代に
宝院を建立して多賀谷家の菩提寺とした。同寺は、もと大串にありて、天台宗であつたものを禅宗に改め、現在の所に再興したものである。

現在、多賀谷家の墓碑及び、現存の子孫の墓地も同寺に建立されている。

三 室町時代の下妻地方

I 下妻地方の領主

鎌倉府と下妻 足利尊氏は京都室町に幕府をひらき、第二の武家政治を開始したが、関東が鎌倉幕府以来、武家政権の重要な地域であるところから、尊氏は次男の基氏を鎌倉におき関東をおさめさせた。この機会を鎌倉府といい、その長を鎌倉公方という。基氏の没後はその子孫が世襲し、とくに成氏以降は「古河公方」と称するが、関東の名門として戦国末期までつづいたのである。また公方を補佐するのが関東管領であり、上杉氏がこれを世襲した。ここに関東は「公方—管領」体制による支配が開始され、やがて京都室町幕府と対立をはじめるのであるが、ここに下妻地方もその支配下におかれただのである。

足利氏満と下妻 貞治六・正平二十二年(1367)、鎌倉公方基氏が没すると、その子氏満が公方の職についた。このころ西国では依然として南北朝の抗争が展開され、また関東においては、室町幕府と鎌倉府の対立を背景とする政情不安定の状況を呈しつつあった。こうしたなかで氏満は関東一帯に勢力を拡大し、室町幕府へ対抗する野心を持つとともに、関東における南朝勢力の残党の討伐や、下野の小山氏、常陸の小田氏等の討伐のため、関東各地を転戦した。応永二年(1395)十月十七日付で氏満が、武蔵武士である安保因幡入道(憲光)に対して、「常陸國下妻庄内小嶋郷半分」(市内小島)を与えていた文書が残っているが、これは康慈(天授六年(1353)六月、さきの氏満による小山氏討伐に際して、従軍した安保氏への恩賞であった。またこの小嶋郷は南北朝の抗争の過程での南朝

勢力の關所地であったと考えられる。氏満の転戦の結果、鎌倉公方の関東における威信は一層高まつた。氏満の子満兼が幕府の「三管四職」に対応して「関東八館」(下野の小山、宇都宮、那須、長沼、下総の結城、千葉、常陸の佐竹、小田の諸氏)を設けたのはそのあらわれであり、以後鎌倉府と幕府の対立は激化していくのである。

下妻周辺の領主 南北朝の動乱のなかで下妻城が落城し、下妻一族が戦死、滅亡するとその後下妻は周辺の飯沼氏によって支配されたといわれている。しかしこれは戦国動乱期に「下妻庄司」飯沼親範が、多賀谷氏の下妻進出によって滅ぼされたということを根拠とするわけであるが明らかでない点が多い。

この時代における下妻周辺のおもな領主勢力を概観すると、下妻を中心として東北には室町時代を通じて常陸國守護である佐竹氏、西北には小山、結城、山川の諸氏、北の下館には水谷氏、東の筑波山麓一帯には小田、真鍋、宍戸氏、南の石下、豊田にはかつて名門を誇った常陸大掾氏の一族である豐田氏、また、南西には飯沼氏などが割據し、さらに西の古河には長禄元年(1397)十月以降、鎌倉より公方足利成氏が移って「古河公方」と称し、関東における有力な政治勢力を形成していった。このような各勢力のなかにあって、多くの小規模な武士達が、さまざまな利害により各勢力に従つたり、あるいは反逆したりして下妻周辺にさまざまな政治情勢をつくり出していったと考えられる。

2 多賀谷氏と結城合戦

多賀谷氏の登場 戦国時代下妻地方を支配下におさめた多賀谷氏の癡地は、武藏国埼玉郡騎西莊多賀谷郷（現在の埼玉県北埼玉郡騎西町）といわれている。『多賀谷記』『多賀谷譜』などの家譜によれば、多賀谷氏は桓武平氏であり、相模國金子に居住していた金子十郎家忠という武士が、鎌倉府の御家人として源賴朝から武藏国騎西莊を与えられ、その子家政が居住地の郷名多賀谷を名乗ったことになっている。しかし武藏七党系図によると、野々党の光基がはじめて多賀谷を名乗り、金子家政はその家を継いだことになっている。

さて家政は「右衛門尉」を称していたようだ、『吾妻鏡』の暦仁元年

（三三〇）二月十七日条には、鎌倉幕府四代将軍九条頼經の上洛に際し、随兵として、二十六番目に多賀谷右衛門尉の名がみえている。つきの重茂、景茂父子は弓射にすぐれしており、それぞれ幕府において正月に挙行される「御弓始」の儀式に「御箭射手」として、少なくとも建長三年（一二五）、建長五年、慶元元年（一二五）、正嘉二年（一二五）の四回にわたってその役を勤めている。幕府のなかで「もののや」として活躍する多賀谷氏の姿を、そこにあることができる。

その後の家経、政忠、家茂についてはあまり明らかでない。家経が北条執権貞時に、收忠がおなじく時宗に仕えたとする家説もあるが疑問である。家茂のあとを継いだ政朝には男子が生まれなかつたので、下総の、名族結城氏から養子を迎えた。それが満広の子光義である。理由は明らかでないが光義はやがて結城に帰る。またこのころ、すでに多賀谷氏は結城氏の家臣となつていた。しかも主家から養子をうけるほどの有力な地位にいたことになる。したがつてここに結城合戦における多賀谷氏の

活躍の下地がつくられたと考えることができます。

戦乱の幕あけ——禅秀の乱と結城合戦—— 関東の政治情勢は相変らず不安定であった。応永十六年（一四〇九）鎌倉公方滿兼が没すると、その子持氏が繼いたが、これと対立した田村領の上杉氏憲（禅秀）は、不満をもつていた滿兼の弟滿隆や、同族、一門および武藏を中心とする多くの関東武士によりかけ、応永二十三年挙兵して持氏を鎌倉から追い、鎌倉府の実権を一時掌握した。これを「禅秀の乱」という。

下妻地方の武士がこの乱に際し、どのような動きをしたか不明であるが、常陸では大旗溝聲、山入寺義、小田持家および行方、小栗などの武士が禅秀方となつた。「禅秀の乱」は翌応永二十四年幕府軍によって鎮圧されるが、この乱は関東をさらに混乱にまきこんで「永享の乱」「結城合戦」の引き金となつたのである。

禅秀の乱後、幕府と対立した持氏は、やがて管領上杉憲実とも政治的対立をひきおこしたため、永享十年（一四〇八）、上杉憲実は幕府と連合して鎌倉を攻め、翌十一年持氏を自殺させた。これが「永享の乱」である。

この時、鎌倉を脱出した持氏の遺児であつた春王、安王兄弟を結城氏朝は、永享十二年結城城にむかえ、これに近隣の武士が加わって結城体制がとられることになった。多賀谷氏は結城の家臣として一族、將兵をあわせ、ともに籠城したようである。それに対し、幕府は一〇万余の大軍をもつて結城城を包囲した。結城方は必死で抵抗をつづけたが、嘉吉元年（一四四一）四月十六日、激戦の末落城した。城主氏朝をはじめとして（多賀谷）光義や、光義の長男であつた多賀谷彦太郎ほか、結城、多賀谷一族主従はほとんど戦死し、春王、安王は幕府軍の捕虜となつて京都へ護送の途中、美濃國垂井で殺された。これが「結城合戦」である。こうした一連の事件は関東における戦乱の幕あけをつけるものであつた。

四 戦国時代の下妻地方

1 多賀谷氏の興隆と下妻支配

結城家再興の功臣多賀谷氏 結城合戦のあと、結城氏の遺領はその一族山川氏義に預けられたが、結城の家臣や領民たちは、裏切者の氏義に心服せず、領内の治安は不安定であった。

結城落城のとき、多賀谷氏家、高経（一書氏經）兄弟は主家の幼児を守って戦場を逃れ、常陸國太田の佐竹義憲の所にかくまわれていた。八年の歳月が流れ、宝徳元年（1389年）足利成氏が鎌倉への帰還を許され、関東の主として公式に認められたので、氏家兄弟は結城家再興の希望をもち、すでに伊佐郡に復帰していた水谷勝氏と協力して、結城の旧臣等を集め、主家の旧領結城郡一帯を斬徙え、主家の幼児を結城に迎えた。このとき山川氏義がどうなつたのか、その記録は見当らない。この後の山川氏は結城氏の関係から推して、山川城を中心とする旧領だけを安堵されて、穏やかに結城城を明け渡したものと考えられる。

旧領を回復して結城城に復帰した結城氏の遺児は、宝徳二年（1390年）一書同三年（1391年）鎌倉に出仕して成氏に謁見した。成氏は大いに喜び、断絶していた結城氏の再興と旧領地全部の相続を許し、近臣の列に加えた。結城氏の遺児は元服して、結城代々の通称七郎を称し、成氏の一字を受け、成朝と名乗ることになった。

多賀谷兄弟は、成朝の左右に侍し、諸臣を指揮してその存在は結城一門の長老格であつた。一書高経は代記（一書）・新城守田郷氏家、同四郎成朝、音頭忠重を付して記され、外からも結城の親類としていた。

多賀谷氏の下妻進出 多賀谷兄弟は、協力して領内の治安の回復を図っていたが、鬼怒川を隔てた常陸國關郡の地は、小土蔵たちの力が強く、なかなか新主の威令に服かない状況であった。そこで相談のうえ、弟高経（一書氏經）は結城周辺の治安を確保することとし、兄氏家は関ノ館（一書關本城）を根拠地として、次第に勢力を増大していく。

その頃、鎌倉では、結城合戦で討死した將士の子弟たちが、統々と公方成氏の身辺に集まり、上杉一族を父兄の仇とする感情が高まりつつあった。上杉の老臣等はこれを憂い、不意に成氏の御所へ押し寄せたが、急を衝いて駆けつけた小山、小田等、反上杉の將士がこれを撃退した。

結城、里見等成氏親近の將士は、上杉方の横暴を押えるべく、享徳三年（1393年）十二月二十七日、皆領の館を急襲し、多賀谷氏家が憲忠の首級を挙げ、以下郷内の臣族を皆殺しにして引き揚げた。

上杉方の訴えを受けた將軍義政は、関東諸将に成氏追討を命じたが、結城、小田、小山以下の諸将は成氏を援け、翌康正元年、上杉勢を武藏国で撃破した。大敗した上杉方は、残兵をまとめて、小栗城に立てこもったが、ここもまた成氏の軍に攻め落され、小栗氏はこの戦いで没落した。

同年六月、將軍義政の命を受けた今川範忠が、海道五か国の兵を率いて鎌倉に乱入し、成氏の部将等を擊破し、鎌倉の街を焼き払った。成氏は軍を返してこれを救おうとしたが間に合わず、やむなく古河に城を築いて根據地とした。この後、成氏を古河公方と呼ぶようになった。

多賀谷氏家、高経（一書氏經）兄弟は、結城家の柱石として常に成朝の左右に侍し、公方成氏に対する功勞があった。とくに、氏家は管領憲忠の首級を挙げた歴功もあり、この年、恩賞として下妻莊および関郡の地の領有を安堵され、大名の列に加えられた。

結城の多賀谷氏と下妻の多賀谷氏、氏家は、関ノ館にあり、領内を守めていたが、寛正三年(西元1462年)下妻城が竣工したので、弟高経の子家植を迎えて城主とした。

氏家が下妻へ去った後の結城では、高経ひとり権勢を振るい、成朝を輔佐していたが、成朝は在城十三年にして、この年の暮二十四歳の若さで死んでしまった。成朝の死については二説あって、「結城家文記」には「氏朝の末子成朝は、結城合戦のとき乳母が懷抱して佐竹へ逃げた(多賀谷の功績とは書いてない)。成人した成朝の才幹がすぐれているので、将来は権力を押さえられるようになることを恐れ、高経が雪打の遊びの間違いのふりをして殺した」とあるが、「結城系図」では、「成朝は山川氏義の子で、多賀谷氏家が連れて逃げ、筑波に隠れていた。結城合戦のとき、氏義は敵方に裏返りをしたのだから、氏義の子は旧主の仇だとして、諸臣相議して、雪打の遊びのまねをして殺した」となっている。

成朝には子が無かったので、氏朝の三子長朝の子氏広が相続した。長朝は結城合戦のとき、結城せずに武藏国に逃れて隠れていたのである。氏広の娘は、多賀谷家植の妻である(結城系図)。氏広も若死して、その子政朝が幼くして結城城主となつた。

高経は引続き権勢の座についていたが、嫡子正順(家植の兄)が跛脚のため武士を捨てて僧になつたので、その子和泉守が祖父の跡を継ぎ、幼主以下諸臣を膝下に置き、自ら城主のごとき振舞であった。やがて政朝は成長し、和泉守の横暴を抑えたく思つて、独力ではいかんともなし難く、家植に内通した。家植にとっては、政朝は妻の甥であり、和泉守は自身の甥であったが、家植も和泉守の横暴振りをにくんでいたので、明応八年(西元1469年)八月一日、政朝と力を合わせ、和泉守およびその一類を悉く誅伐し、ここに結城の多賀谷氏は終りを告げた。

下妻進出当時の四隅の状況

家植が下妻城主になると、数年後

て、世にいう戦国時代の幕は切って落とされたのである。

そのころ下妻周辺の地には、平将門を討伐した平貞盛の流れを汲む大塚氏と、その一門の豊田、真壁(前の下妻氏)、小栗氏は既に滅亡)、同じく藤原秀郷の後胤小山、結城、山川(後の下妻氏)、關氏は既に滅亡)、源義家の弟義光以来の佐竹、鎌倉幕府の重鎮八田知家を祖とする小田、宍戸、宇都宮等の旧族が、各々その一族の頭首として健在であった。十数代、幾百年の伝統を誇るこれら諸氏に対して、他国から來た新興の多賀谷氏には、武力以外に競べ合う何物もなかった。

これら領主の下に中小の土豪たちが居て、一定地域の住民を支配しながら、年貢や公事を負担していたが、戦国乱世のこの頃になると、領主間の競争に従事したり、領主の力が弱体化すると、年貢や公事を怠つたり、更に有力な土豪は、領主と争つてその地位を奪うようになつた。

これらの土豪たちは、より強大な勢力の下に結集して、その庇護の下に自己の勢力を維持し、他の勢力からの攻撃を防ぐためには、生命を賭けて戦うのであるが、この地域集団の頂点に立つて、指導的役割を果たしたのが多賀谷氏であり、この多賀谷集団を指して「下妻衆」と呼ばれるようになるのである(上掲の写真、北条氏繁判物参照)。

このような地域集団に参加せず、反対勢力の側に立つ者は、豊田氏のように没落するのであるが、他国で没落した庄人の中には、多賀谷氏の声望を聞いて下妻へ集まつて来た者もいたので、「下妻衆」の勢力は拡大していく。

しかし、百余年を経過した最後の段階で、「下妻衆」もまた進路を誤り、徳川方には味方せず、反対勢力の側に立つて、没落するのである。

城の拡充強化 下妻城は、東西に沼を控え、南方二辺が深泥であるから、陸続きの北方にだけ幾重にも土塁・濠を構えているのは、地利に適った築城法であると考えられる。のみならず、僅か三里（一二キロメートル）を隔てた結城と下館に、下妻をにくんでいる強敵が控えていることを意識しての、防禦態勢であったとも考えられる。

このように地の利を得た堅固な配置の城は、極めて珍しいといわれている。この配置が完成した年代は明らかではないが、「多賀谷譜」によると、寛正二年の築城は「東西両館を構え、東館を本丸となす」とあるから、その当時の規模は、現在の多賀谷城跡公園（旧地名・本城）の辺を本丸として、館沼を隔てた稲荷山の辺を西丸とした程度であろう。

天正六年から翌年にかけて、「西城（栗山）を修補す。堀を広く、池を深くし、橹を上げ壁を高くし、要塞を構う」とあるのは、それより以前に拡充強化されていたものを、さらに修補強化したものと思われる。

秋田県立秋田図書館にある「常陸國下妻城図」（上掲の写真）は、その遺構が最近まで残っていたから、年輩の人達には納得がいくと思う。

この地図によると、旧下妻町の全域が城構えの中に入っている。北方に対する構えは七重で、下木戸の北に、大宝沼から砂沼に至る濠があり、出入口は東西二か所だけになっているが、現在のどの辺であるかわからない。その次の第一の土塁は、現在の下木戸の土手山である。第二の土塁は、相原山入口、以下上宿入口、本宿入口と続き、本宿から中城（現在の市庁舎辺）への出入口は厳重になっている。館沼の西も五重の構えで、館沼から下妻神社の裏手を経て、西町と大町との間に土塁と濠があり、竜沼と砂沼との間も、土塁と濠で連絡していたことがわかる。

「多賀谷譜代之覚」によると、この地域に、かなり多くの侍が居住していたことと、現在の下子町はもとは外護町と書いたことがわかる。

小田原北条氏との飯沼周辺争奪

この時代の諸侯の向背は千変萬化を有様で、多賀谷氏のように、一貫して反北条の旗を立て通した武将は、極めて稀な存在であった。

すでにこの頃、公方義氏は落ちぶれて北条氏の庇護の下にあり、その老臣柴田晴助は古河城を放棄して關宿城にあったが、故あって小田原の衆団から離れて、佐竹と結ぶに至った。

そのうちに、結城晴朝もまた小田原衆團から佐竹の連合に加わったので、北条氏は、常陸南部の小田原勢力確保の布石として、飯沼、弓田、大生郷に砦を築き、關宿を牽制すると共に、下妻を攻める構えをとった。飯沼周辺は、先年すでに下妻衆の傘下に入っていたおり、このたびの北条氏進攻により、「人民居を失ひ、下妻に逃げ入る」と、「多賀谷譜」は伝えていている。

天正四年（一五七六）、このような緊迫した情勢下に、五十八歳の下妻城主多賀谷政經は、南侵または北略二十余年の生涯を閉じた。嫡子重矩（このころは尊經）は十九歳の若年ながら、一族老臣をはじめとする下妻衆の堅い結束のもとに、この難局を背負って立つことになった。

重矩は、佐竹義重の援軍を得て大いに敵を破り、斬首四百級、ほとんど威嚇的打撃を与えたが、敵はなお弓田砦を修理し、翌五年には北条の軍将を天神城に入れて、根強く下妻を襲う姿勢であった。

山川氏との小競合 結城氏が佐竹氏と結んで、佐竹氏と最も深い関係にある多賀谷氏に対してまでは、結城及びその一族の感情は解けなかつた。

天正五年、結城の族將山川晴貞は、部下平塙博慶を遣わして、下妻領の音谷、和賀（現在八千代町内）辺を侵略したが、古沢以下近郷の士たちが、これを撃退した。

光明寺 浄土真宗 下妻市妻乙

光明寺は下妻駅近くにあり、親鸞の高弟で閑東七老僧の一人と云われる明空が開基した寺である。

明空は、相模の三浦一族であつたが、建保元年(一一一三)和田義盛の乱のとき刀を棄て雲水になつた。またま常陸に来て、親鸞の小島道場の近くに来て草庵を結んだ。弟子となつた明空は親鸞の協力を得て光明寺を建立した。親鸞の小島道場は三月寺と呼ばれていたが、笠間市の稻田に領主稻田九郎頼重の招きに応じて云ういわれから、信徒には靈地として崇められてゐる。境内には、

◎親鸞御手植のボダイ樹の古木
明空の植えたと云ふ無しヒイラギ

名にあらわして植るひともと

と明空の歌碑がある。

◎長塚節の「菩提樹」の一節

うつせみの人のためにと菩提樹を

明治三十六年作の一首の歌碑が立つてゐる

3 下妻における親鸞の伝承と遺跡

小島草庵と三月寺 市内大字小島字四体仏に、四体の五輪塔があつて、一般に四体仏と呼ばれ、その地名となつた。

四体仏には、親鸞にまつわる伝承がある。むかし、ここに欽明天皇、用明天皇、聖德太子の墓があり、そこへ寺を建てて三皇院と呼んでいた。後に、親鸞の墓を加えて四体仏と呼ぶようになったのである。

この三皇院で、建保元年(一一三)の春三月の間、親鸞が法談を続けたので、寺号を三月寺と改めた。

親鸞はその後も熱心に布教を続けたので、この地方の大衆は帰依する者が多く、とくに小島の領主小島丹後入道清武、同郡司武弘父子は帰依のあまり、館を寄進した。貞応二年(一一三)ここに寺を建てて、西木山(一書、亞木山)光明寺と名づけ、弟子明空に与えた。

明空と光明寺 明空は俗姓を三浦荒次郎義忠(改善三浦風村、同寺鐘銘に和田義次)といい、同族和田義盛と共に執権北条義時を攻めて敗れ、東北へ落ちのびる途中この地を通り、新地の牛頭天王社(いま五所神社、もとは常陸銀行邊にあった)に仮宿した。そのとき多勢の者が親鸞の法談を開きに行くので、義忠も同道して法談を聞き、歓喜して親鸞の弟子となり、法名を明空と与えられて光明寺の開基となつた。

蓮位房と下間氏 蓮位房は俗姓を兵庫頭京重といい、源三位頼政の一族(姓氏家系大辞典では五代孫)であるという。頼政の末子(或は孫)頼茂の謀反に一味したといわれ、平家に討たるべきところを、親鸞に救われて弟子となつた。蓮位房はシモツマ出身とのことで、子孫は下間氏と称し、本願寺代々寺長の坊官である。

以上のこととは、下妻の江戸期の郷土誌『常總誌略』から摘記した。

小島草庵遺跡　『常總誌略』によると、三月寺は元龜二年の小田原北条氏来攻の際に兵火に焼かれたので、光明寺境内に移ったという。

その跡が、現在の「下妻市指定史跡 小島草庵跡」である。中央に、西面した大きな石碑があり、正面に「親鸞聖人御旧跡」右(北)側に

「三義御住居」とあり、その下の台石に「通照院 願主亮翁 肥後國上益城郡鶴手水陳村さんかやいそ」、反対側(東)に「宝應五乙亥歲

二月二十八日 武江仲田 米津義興書」と刻んである。

親鸞の下妻在住は、「常總誌略」では一〇年を越える期間のようであるが、一般にはこの石碑にある三年在住の方が定説になっている。

この石碑の背後(東)に、親鸞御手植と伝承する大銀杏樹があり、この枝が東北(稻田の方角)に向って伸びているので、俗に「稻田恋しの銀杏」と呼ばれている。数年前、周囲の土地が陸田になったので、過湿のために枯死しそうになつた。下妻市では、周囲の陸田を買取して休閑地としたので、現在は樹勢が回復に向いつつある。

光明寺の菩提樹その他 光明寺門前

の広場に、「下妻市指定天然記念物

親鸞御手植菩提樹」がある。根元に古色蒼然たる石碑があつて、「高祖聖人

御樹」と書いてある。台石の

下部が地面から離れて空間になつてゐるが、上部の一部が樹皮の中に深く巻き込まれて安定している。もとの地面がこの高さだったことは、樹皮の具合からも推測できる。長い歳月を経た

雨水の浸蝕の激しさを物語る現象である。

光明寺には、親鸞の高弟明空の手植と伝承される。格(市指定天然記念物)のはかに、柏の老木(樹齢数百年)や、

「生き蓮華」という寺宝にまつわる親

鸞伝承も語り継がれていく。

東国移住の理由　親鸞は、なぜ、常陸国を新天地として選んだのであるか。彼には妻子があったから、生活の保障がえられる所でなければならなかつたはずである。これには、いくつかの見解が出されている。一つは、関東には三善姓が多く、常陸那珂郡に三善の地名があることから、親鸞の妻信尼の実家である三善氏が常陸にも土地を所有していたことはありうる所とし、それを頼つて移住したとする。二つには、越後の親鸞が住んでいた近辺の地名と同一のものが、常陸にもみられることがある。当時にも越後あたりからの移民が行われており、そのルートにそつて親鸞も移住したとする。しかし、同一の地名は全国各地にみられるので、その一致だけで推論することは問題がある。移住の理由には不明な点が多いのである。

2 親鸞と下妻

鎌倉新仏教と親鸞の思想　鎌倉時代には新しい仏教がいくつが誕生している。その特徴は多くの修行方法や經典の中から一つを選び(選択)、もっぱら一つのことを行すればよく(尊修)、しかもやさしい方法(易行)であった。すなわち坐禅(禪宗)、題目(日蓮宗)、念佛(淨土宗、淨土真宗、時宗)である。

谷田部城の争奪 かつて谷田部城主だった酒見主殿は、落城後 家臣

と共に弟岡見治部(牛久城主)の厄介になっていたが、天正八年二月、田
領回復を企て、治部のほか足利、岩崎、板橋、小張等各城主の協力を得
て、北条氏輝の出馬を要請し、急に谷田部城を包围した。

城主多賀谷経伯は、煙を鳴らして危急を下妻へ報じた。重経は直ちに
陣営を出して出陣の用意をしたが、たまたま下妻へ来ていた経伯の子経
明は、父の安危を心配のあまり、ただ一騎で谷田部へ駆けつけた。従者
二騎が後に続いたが、敵の重圧を突破することができず、慄戦苦闘した。
この有様を城の櫓から望見した経伯は、わが子の苦戦を救おうとして、
城門を開いて敵陣に斬込み、父子ともに壮烈な戦死を遂げたので、城は
遂に敵の手に落ちてしまった。

そのあとへ到着した重経は、全軍の先頭に立って敵陣に突撃したので、
南方勢は算を乱して敗走し、谷田部城は再び下妻衆の手に帰し、平出伊
賀以下五人の将に守らせることにした。

下妻島平定と大生郷天満宮再建 同年暮、大生郷天神城攻撃のために
出陣したので、南方勢は飯沼、弓田両城から撤退した。翌年正月、下妻
に避難していた飯沼周辺の村民たちは帰住した。下妻衆は勢に乗じて下
妻島に攻め入り、これを拿下に收めた。重経は、戰勝感謝のため大生郷
天満宮及び大生寺を造営し、鎧、歌仙図、鏡天神図等を奉納した。

結城・山川領を侵略、小川三郎の來属 この前後数年の間に、板橋、
舟生(ともに現在関城町内)、女方(現在下館市内)を攻め取り、女方里を
渡辺老岐に守らせ、また郷士をして時々山川領を侵させ、里民の財資を
奪わせた。

小川(現在下館市内)の小川三郎が、結城一門であるにも拘らず、結城
に背いて下妻に来属したのもこの頃である。

多賀谷氏、さらに南進する 小田氏治、守治父子が小田城を失い、藤

沢城にこもってからは、その勢威ますます衰え、領内の諸将は半独立の
形で割拠し、直接小田原北条氏の節度を受ける有様であった。

これらの諸将たちは、相協力して共同の敵を防ぐという程度のもので、
下妻衆のようには強力な統制のもとに結集した集団ではなかった。

天正十四年、重経はまず小張(現在筑波郡伊奈村内)を攻め取り、進ん
で足高(現在伊奈村内)を攻めたが落ちず、翌年再び兵を起し、板橋(現
在伊奈村内)、岩崎(現在福敷郡茎崎村内)を攻め降したので、ついに足
高も陥り、城主岡見宗治は牛久(現在福敷郡牛久町内)へ落ち延びた。

同十六年更に小室、高崎(ともに現在茎崎村内)を取り、進んで牛久を
攻めたが志を得ず、翌年に入り、更に牛久、筒戸(現在筑波郡谷和原村
内)、守谷(現在北相馬郡守谷町内)の諸城を攻めたが、遂にこれらを手
に入れることはできなかつた。

感状 上掲の写真は、天正十六年の牛久攻めの時に、多賀谷重経から
石浜因幡守に与えられたものである。感状とは、戦いの後に武将が部下
の戦功を賞して与える文書のことである。南北朝期以降とくに戦国期に
最も多くみられるが、これは全国に割拠した戦国大名が相互に戦いを展
開した結果である。文書に使用される料紙、形状は一定ではないが、内
容としては最初に当該者の戦功を賞し、次にそれに対する恩賞が記され
るのが普通である。恩賞では所領が新たに給付される場合が多いが、受
領、官途(官位)の私称が許される場合もあつた。石浜氏の場合には「因幡
守」の私称が許されたのである。また受賞者はこれらを家名誇示、恩賞
請求の証拠として永く保存した。

なお、多賀谷氏の発給した感状には所領の新給付よりも官途の場合が
多いことが特徴である。

佐竹氏との婚姻と近攻遠好策 天正十一年(1583)重経の嫡女を、並首義重の嫡男義宣に嫁した。母は江戸崎城主土岐頼高の女であるから、当時の一般常識とされる近攻遠好の政略結婚が、ここでも行われていた力である。

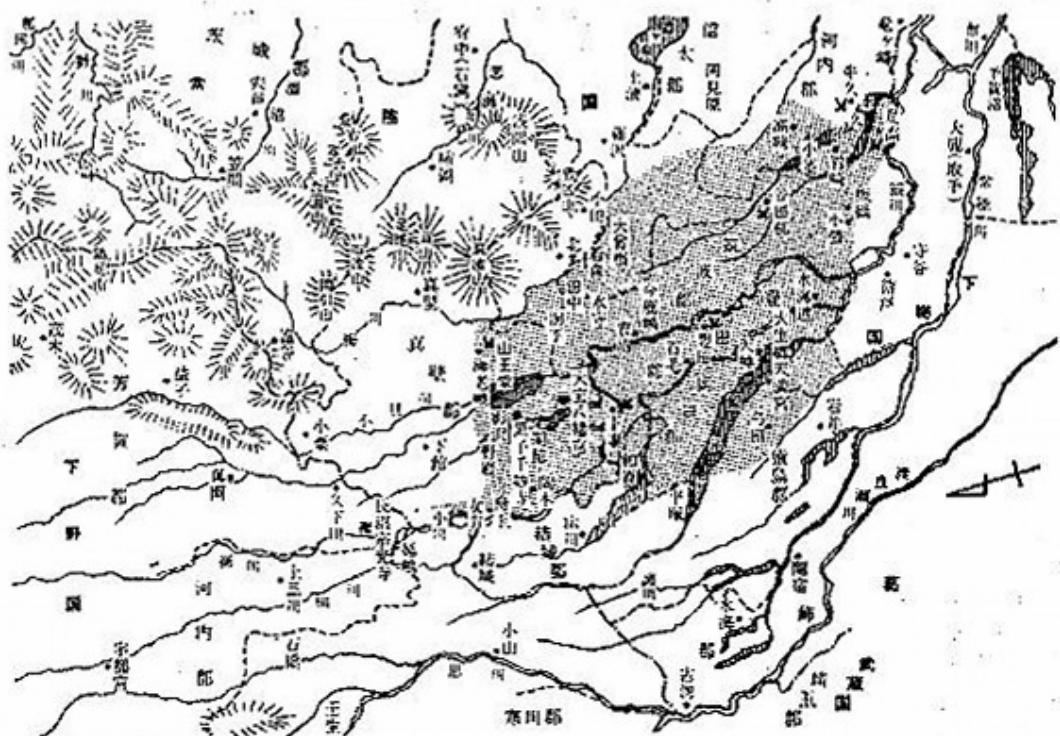
この頃、武田勝頼が織田信長に滅ぼされ、信長は明智光秀に弑された。光秀は羽柴(のちに豊臣)秀吉に敗れ、秀吉はさらに柴田勝家を滅ぼすなど、天下の形勢は走馬灯のように回まぐるしく変化した。

重経はこの変化に対処して、いち早く秀吉に使を遣わして、豫勝を祝い、その傘下に入るべき態度を示した。

当時すでに下館の水谷勝俊は、徳川家康に接近していたことが、『精城史』(第一巻 古代中世史科編)で知ることができる。

石毛多賀谷氏の是選と実力者番成策 『多賀谷譜』に「天正十三年、石毛城主多賀谷経光入道圓徳寺(家重の三男知伝者経門の嫡。経門は、石毛前城主豊田正家の嗣と為す)、勇力倫を越え、反心有り。重経、白井対馬に論じて」、駿齋の円明寺で説教させたことが書いてある。後出の異本『多賀谷氏』系図には、慈山祥潤(家植)の三男圓徳寺妙天、その子透徳寺石庵が「逸人の為に祥潤(政経)に説教せられた」と書いてある。経光に反心が有ったのか、無いのに疑われたのか、いずれにしてしも、頭角を顯わす者は危険視され、実力ある者は警戒されるのが世の常であり、とくに戦国時代には、忠臣が逆臣と疑われて謀殺された例が数多い。後に、白井対馬(金洞)も疑われて殺されている。

『多賀谷氏族旗下諸家臣』という書には、「旗下の面々(一部一箇の主)」の中に「堀込居住、堀込秀徳寺(一書圓徳寺)」とあるが、堀込に居住していたのではなく、堀込の円明寺に埋葬されていることの誤記であろう。



多賀谷氏全盛時代の勢力図

2 戦乱の終結と多賀谷氏

秀吉の小田原征伐とその後の多賀谷氏 天正十八年(1590)小田原城總攻撃の命を受けた関東の諸将は、出陣して秀吉に謁見した。その席上、秀吉は重経の豪勇をほめて脇差を与えた。この後は旧来のとおり結城氏に服属することを命じた。独立を願っていた重経は、内心甚だ不満であったが、拒否することはできなかつた。

攻防半歳の後、北条氏は遂に降伏し、ここに秀吉による天下統一の念願は達成された。北条氏に従事していた常陸南部の諸家は遂に没落した。秀吉は、東海地方五かの大名徳川家康を北条氏の後に移し、関東、奥羽の諸侯をその節度の下に置き、以後各自の侵略を厳禁した。

重経は石田三成に結び、嫡男三経(十三歳)を豊田・岡田両郡の領主として結城氏に仕えさせ、一応秀吉の命令を実行したこととし、重経自身は、下妻の領主として独立し、佐竹義宣の弟宣家(七歳)を養子として相続人と定めた。ここにおいて、多賀谷・佐竹・石田の因縁は一層深まつたのである。

魔境された三経は、はじめ和賀(現在の八千代町若)の島城に居たが、太田に堅固な城を築いて移つたので、島城は古沢笠渡に授けられた。主家が二派に分かれてしまつたので、家臣たちの動搖は掩うべくもなかつた。『多賀谷譜』はその状況を「家臣たちは、お互に警戒し合つて独居するようになつた」と書き、さらに「多賀谷家、將に変有らんとする」と結んでいる。

この頃、結城晴朝は、時勢の変化をさとり、秀吉の養子(家康の実子)秀康(二十一歳)を養子とすることに成功し、自身は隠居した。

朝鮮出兵と重経の対応 天下統一に成功した秀吉は、その翌年にさく

と、さらに朝鮮出兵を計画し、全國の大名に戦備と出陣を命じた。重経は、結城秀康の部下として、名護屋警備を命ぜられたが、病と称して出陣しなかつた。重経は、多賀谷氏としての独立が、下妻領だけにしか認められなかつたのさえ不服であるのに、今まで結城の部下として扱う処置に不満だつたのである。

ちょうどその頃、觀音寺(一説多宝院)が堂舎の再建を願い出たが、適當な用材がなかつたので、下野國長沼(現在栃木県二宮町内)の宗光寺(天台宗)の堂舎を壊して下妻へ運んだ。しかし、觀音寺は真言宗(多宝院は曹洞宗)であり、天台寺院の解体材では建築様式が違うので、やむなく天台宗の法泉寺再建(一説、城修理)に使用してしまつた。法泉寺の山号は虚空藏山であり、その境内は、城の外郭虚空藏曲輪であるから、虚空藏山再建すなわち虚空藏曲輪の修理だつたのであろう。

このとき、堂舎取り壊しに頑強に抵抗した宗光寺の住職が、後に徳川家康から厚く信任された天海僧正であるとは、奇しき因縁であつた。

宗光寺から訴えを受けた秀吉は大いに怒り、重経が出陣しなかつた罰として「城を破却せしめ、金子千枚を出さしめて、その身を助け置くべきこと」という『多賀谷破却之狀』が『常陸遺文』に採録されている。これに関して、文禄五年(1596・慶長元年)に作成された宗光寺の『中興開基縁起』には、多賀谷修理亮は寺院を損破した懲罰に逢い、同年(天正二十年)初秋に至り「居館の門壁・城外の竹木、天下將軍より破り取らるる事、宗光寺の破却と全跡相似たるもの哉」と書いてある。このことが後世に至り、慶長六年の城地没収と混同され、さらに尾崎がついて、城破却、奥方腰元自殺、美女塚築造という一連の落城悲話が作り上げられたのではなかろうか。

関ヶ原戰後多賀谷氏

(十一万石)から越前國北ノ莊(後の福井、六十七万石)に封ぜられ、慶長六年義父晴朝はじめ家臣多賀谷三経、同村広、山川朝貞等および客分の江戸重通父子、小田氏治父子等を伴つて就封した。このとき、水谷勝俊は途中まで従つて行つたが、家康に呼びもどされて会津城受取の役を命ぜられた。無事に大役を果たした勝俊は、年來の功勞もあり、結城から独立して下館四万七千石の大名に取立てられた。

三経は、越前國柿ヶ原で三万二千石をあてがわれ、その三御納戸給帳によると、「侍數合わせて百九人、此外切米取□人、歩行者四拾□人」を召抱える重臣となつた。村広は二千五百石を宛行われ、ほかにも多賀谷姓の者が數人ある。

養子宣家は下妻に留っていたが、慶長七年、実兄佐竹義宣が水戸(五十三万石)から出羽国久保田(後の秋田、二十万石)へ転封になつたので従つて行き、檜山城(一万石)を宛行われ、家士數十人を扶持する重臣となつた。経伯の繩銅経並も檜山へ行き、御一門と称された。

重經の弟重康、その子左門、一族源左衛門の三人は、下館の水谷勝俊に召抱えられ、特に重康は重臣級の高禄を受けたことは「水谷家中石高帳」(上掲写真)によつて知ることができる。

これに反して、武藏國府中にかくれたまま降伏を申出なかつた重經は、久席裁判により、反跡明瞭なりとして、下妻領六万石を没収のうえ、名籍を削つて庶人(武士でない一般人)とし、追放の処分を受けた。翌々八年、ひそかに下妻へ帰つたが榎原康政のために逐われ、秋田、江戸、京都等を輶々とした末、元和四年(六〇)近江國彦根で没した。

以上によつて、多賀谷氏のうちで処分を受けたのは重經一人だけであり、他の者に対しても「お構いなし」だったことがわかる。

関ヶ原の戰と重經の対応

慶長三年(三五八)八月、太閤秀吉の死とともに、天下の大勢は豊臣氏を離れ、代つて徳川家康が、次第に衆望を担つて天下に臨む氣振りがみえてきた。

豊臣家の直臣石田三成は、御家安泰のために徳川氏を除こうと決意し、深く上杉、佐竹両雄と結び、次第に同志を糾合し、機をみて事を起こそ、うと企てた。石田、佐竹と深い関わりをもつ多賀谷重經は、その同盟に加わつたが、太田城の三経は、結城秀康(徳川家康の実子)の重臣として、これを監視する立場にあつた。

慶長五年、徳川家康は上杉討伐を決意して東國に下り、七月二十一日江戸を発して本營を小山に進め、会津攻撃の部署を定め、佐竹、多賀谷らの参陣を促したが、佐竹義宣はすでに上杉景勝への援軍を会津城に入れ、自らも軍備を整えて奥州棚倉に陣し、家康の本陣が白河に入るのを待つて、景勝とこれを夾撃(はさみうち)しようと構えて居り、重經もまた家康が小山を発したら兵を擧げよう機会を窺つているので、いざれも病と称して健軍しなかつた。

これを察知した家康は、小山から下妻へ使者を差し、その不参加を責めたので、重經は事の露頭をおそれ、ひそかに居城を脱出して武藏國府中に身をひそめた。

石田三成率の急報に接した家康は、秀康を留めて上杉押さえの總帥として、自ら大軍を率いて西征の途に上了。義宣は再三の督促にも言を左右にして、会津攻撃に参陣しなかつたが、ここにようやく、徳川氏に服属の決心を定め、老臣東義久に兵を授けて秀忠の軍に従わせた。

九月十五日、美濃國関ヶ原における大会戦の結果、石田方は大敗し、徳川氏は遂に天下をその掌中に收めたのであるが、会津の上杉氏はなほも抗戦を続け、翌慶長六年七月に至つてようやく降伏した。

念仏の専修を唱えたのは法然であったが、

それは「南無阿弥陀仏の六字名号を唱えさえすれば救われる」とする誰にでもできる易行であるから、世間に受け容れられていったが、既成仏教からは批判され、門弟に後鳥羽上皇の女房(女官)と密通事件を起こしてしまった者がいたことから、ついに専修念仏停止の宣旨が降り、斬罪に処せられる者も出、法然は土佐へ流された。

親鸞は、はじめ比叡山で出家したが、二十九歳の時に吉水の法然のもとに身を投じて江津市)に流罪となつた。それから四年を経た建暦元年(三二)十一月十七日に赦免されたが、京都には帰らず、三年後の建保二年(三四)には身を東国へと転じたのであった。

親鸞は、この間に惠信尼と結婚し、子供をもうけている。俗世間の中で念仏してゆく姿勢をとったのである。

そして、彼は罪深い者ほど阿弥陀仏が救済しようとしている対象であるという「悪人正機説」を唱えた。

それは、越後および、のちに関東で、徳を積むどころか罪を重ねるばかりである人びとを直視する中から生み出されたものであった。

親鸞の下妻居住 朝雲は赦免後、越後から常陸(茨城県)へと移るが、その際、たちに稻田へ向ったのであり、下妻に在住した事実はない。たとする説が、かなり有力であった。しかし、親鸞の妻である恵信尼の消息(手紙)が大正十年冬、西本願寺の宝庫から発見されるにおよんで、下妻在住説は事実であったことが証明されたのである。

恵信尼は、京都で晩年を過していた親鸞を娘の覺信尼にまかせて、越後に住んでいた。この消息も恵信尼が娘の覺信尼に与えたもので、昔のことと思い出しながら書きつづったものである。これによれば「さて(書付)、(手紙)、(手記)、(手稿)まと申候ところに、さかいのかうと申ところに候」とき、ゆめをみて候やうは」とあって、常陸下妻の「さかいのかう」というところに居たときに、夢をみたことを語っているのである。それは、眞ん中の仮の顔はよくわからなかつたが(実は阿弥陀仏)、勢至菩薩は法然であり、觀音菩薩の方は親鸞であったという。恵信尼は、これ以後、夫の親鸞をなみたといいの人物ではないと思い、それまで以上に尊敬の念をもって接したといつてある。これは、恵信尼が法然、親鸞を阿弥陀如來の應侍(鷲にひかえる龕)である勢至、觀音の兩菩薩であると考えていたことを示すものであるが、この夢をみたところこそ、下妻の一さかいのかうであった。これが、市内の坂井であることは明らかである。

では、幸井(坂井)郷にはどのくらい住んだのであろうか。恵信尼消息の多くは、弘長二(三〇〇)~三年ごろのものであるから、常陸移住から五十年経ており、記憶も定かでなくなつた部分もあつたに相違ない。移住の際に途中で立ち寄った佐賀(群馬県邑楽郡佐賀)などは、武藏國であつたか上野國であつたか、よく憶えていない。それに比べると、常陸の下妻幸井郷は、はつきりと憶えており、短期間の居住ではなかつたことが知られる。

親鸞御手植菩提樹

市指定天然記念物

下妻市草庵寺 1955年

大幹 樹高二・七三メートル（九尺）

小幹 樹高二・四二メートル（八尺）

大幹小幹共幹周地上一・五メートル

推定樹令 七〇〇年以上

この樹は寛保年間淨土真宗の開祖親鸞聖人が、小島の草庵に三年間滞在し、真宗念仏の伝導に努めていた

が、稻田に去る際記念に植樹したと伝えられ、聖人御遺跡巡拝者の間では有名な老樹です。

歌人長塚節もしばしば当地を訪れており菩提樹を詠んだ一首が傍の歌碑にあります。

うつそみの人のためにと菩提樹を

ここに植ゑけむ人の尊とぞ



好みました。性ヒイラギを

好み、境内に多く植えられたので光明寺を別名ヒイラギの道場と呼んだと伝えてあります。幸い当時の老樹が一本今まで残り、とげがないところからとげなしのヒイラギといわれ、この種の樹では珍しいものです。

小島草庵跡

市指定史跡 下妻市小島

親鸞の流罪と謫居七年の越後での生活はかなりきびしいものでした。その証拠に親鸞の生活は、あまりにも空白や史料も乏しいのです。親鸞は師法然の死を聞き、保京を諦めました。そのとき、京都で面識のあった小島の郡司武弘が親鸞の徳を慕い、この地に草庵を設けて性信房を迎えてやりました。再度の願いを聞いて親鸞は、妻の忠信尼と幼児を連れ長い旅路を重ねて普陀山入初の小島の草庵に入りました。ここに三年間謫居し、越後で業たせなかた真宗念仏の伝導に積極的に乗り出しました。いわばこの草庵こそ、真宗開祖の親鸞が開闢において真種を發揮せられた最初の土地であります。この間に達信房こと俗名下間宗重と出会いました。達信房には親鸞が稻田に去る際、一字後孫三月寺を譲り、この地方における真宗念仏の伝導を指示しました。



今も草庵跡には、親鸞聖人三年退宿と刻した古碑と親鸞を奉ったという稻田忠心の銀杏があります。

なお、忠信尼は忠女覚信房への書状の中では、常陸國の下妻さかい郷に親鸞とともに住んでいた時に見た童供養の夢をしるしています。

推定樹令 七〇〇年以上

光明寺開基明空所俗名三浦亮次郎義忠は、無常を前に親鸞の弟子となり仏道に

2 德川頼房の入部と下妻城の荒廃

慶長五年(1600)関ヶ原の戦勝で、天下の実権は徳川家康の手に帰した。以後、徳川氏の一族と、前からの主な家臣を大名にとり立て、これら親藩、譜代の大名で、関東や諸国の要地を固め、関ヶ原前後から徳川氏に従った外様大名は遠隔地に配置するという政策が着々と進められた。

関ヶ原の翌年には、多賀谷重経が下妻の所領を追われ、その翌年に佐竹義宣が水戸から秋田に転封された。こうして中世以来の旧族は、常總の地から一掃され、翌慶長八年には、家康の十男頼宣が水戸に、同十一年には、家康の十一男頼房が下妻に封ぜられた。このとき頼房は、まだ鶴千代と呼ばれた三歳の幼君であり、多賀谷遺領を含む十万石を領したもの、わずか三年で水戸に転じ、御三家水戸藩の祖となつた。

当時はまだ大坂に豊臣政権が残存していたし、有力外様大名の反逆の危険性もあり、江戸防衛の軍事体制をしくことが幕府の急務であった。とくに水戸、結城、下妻などは、東北外様大名に対する備えとして重視されたのである。大坂の跡後も、元和元年(1615)には、家康の孫にあたる松平忠昌(結城秀康の二男)が、そして翌二年には、家康の甥にあたる久松松平氏の定綱が、あいついで下妻に入部し、さらに寛永十年(1633)には、老中土井利勝(古河藩主)が下妻を領している。このように家康の子やその近親たち、あるいは譜代の重臣をつきつきに下妻に配置するという例からも、下妻の重要性がうかがうことができよう。ただ、江戸初期の下妻の大名は、いずれも在任期間が短く、のちに井上下義蕃が成立するまで一世紀あまりの大部分にわたって、下妻は幕府直轄の御領だったのである。

次のページの図は「下妻内百姓共」九名が連判して「吉右衛門」の非

法の数々を「御奉行様」に訴えた書状である。最初の部分が次のようにある。「下妻の城にある多賀谷氏の兵具、弓、鎧、鉄砲、弾薬、舟板、材木、疊などを、限りなく吉右衛門が自分の在所へ取り運んでしまつたこと。」

一、下妻の城内の多賀谷邸の家を、限りなく吉右衛門がこわへ取り、城廻りの侍たちの家もみんな取つてしまい、その上御代官衆がいた家までもこわしてしまつたこと。

などである。

口付は「亥の正月廿日」とある。この亥年は慶長十六年(1611)の可能性が強い。その前の亥年(慶長四)には、まだ重経が健在で、こんなことを許すはずがなく、次の亥年(元和九)とするとき、幕府の一國二城令によればるか後になるので、この状態は考えにくい。だとすると、頼房が水戸へ移った約一年後ということになる。

訴え出た「下妻内百姓共」の名には、太田、若、川尻、今里、宗道、大山、行田、新堀、加茂の村名が列記されている。「川尻村新右衛門」はかつて小田原北条軍を迎え撃つて武功があつたといわれる赤松氏(賜古沢庭)と思われるおそらく九名とも在地の有力者だったのであらう。訴えられた「吉右衛門」がどこの人だったかは知ることができない。訴状によると、彼の行動範囲は、現在の下妻から、八千代、千代川、石下、豊里、大穂、水海道にまで及んでいる。これらの地は、頼房領十万石、または重経が没収された六万石のゾーンに入るのであろう。一吉右衛門は、どのような地位にあり、どのような方法で、ほしいままでふるまたのであるか。ともあれ、この訴状は十五世紀以来の多賀谷氏下妻城が荒れはてていく様子を、今に伝えているのである。

二 井上下妻藩の成立とその時代

1 井上氏の入部とその系譜

下妻に陣屋といふ地名があるのは、江戸時代の大半にわたって、大名井上氏の陣屋がここにいとなまれていたことに由来する。

井上氏の祖、清秀は三河国の土著で、源姓を称するのは、井上氏の遠祖が清和源氏頼信にさかのぼるためであるといわれる。清秀の三男正就は、戦国争乱の天正年間から徳川氏に仕えて、幼少の秀忠を助けた。江戸開府後は、兩度にわたる大坂の陣での武功により、宿老兼御書院番頭に進み、元和八年(1622)には邊江戸領主五万六千五百石の城主となつた。その子孫は代々、常陸笠間、美濃郡上、磐城平、邊江戸松等の城主を歴任して明治維新に至るのである。これが井上本家である。

下妻井上氏の初代正長は、正就の孫正任の三男で、元禄年間、父の所領美濃郡上郡のうち三千石を分け与えられて旗本に列し、その後甲府領川家に付けられて家老となり、宝永元年(1704)周慶(家宣)が将軍継承として江戸城に入った時、これに従つて西丸の御側衆となつた。翌年、三千石を増加され、甲府時代の加増分と合わせて、その知行地は八千石となつた。正徳二年(1712)將軍家宣が没した後、その御遺命があつたといふことで、二千石を加賜され、美濃、信濃、甲斐、越後の四國にわたつた所領をあらためて、常陸国真壁郡、武藏国埼玉郡、下野国郡賀郡のうち合わせて一万石の領主となり、陣屋を下妻にいとなみ、大名の列に加えられた。のち正徳五年からその翌年にかけては、美濃善養寺社奉行をいう幕府の要職にも就いたのである。

正長就封以来、井上下妻藩は明治維新に至るまで続くのであるが、その一五六年間に、実に一四代の藩主が交替している。井上本家が、下妻初代の兄から数えて維新まで八代であるのに比べても、短命の藩主が多かったことがわかる。例えば、二代を繕ぐはずの正矩は、義父正長よりも僅か二か月早逝し、また、三代を継ぐべき正貞は、父正矩よりも早く世を去っている。ことに八代正直から一二代正信までは、五代続いで若死にしており、そのため七代正建から一三代正兼まで、七代続けて義嗣子という異例の継承が見られるのである。

江戸時代には、末期養子といつて、死ぬまきわに養子を迎えることは禁じられており、そのため取りつぶされた大名も多かつたので、由井正雪事件(1751)以後は一般に緩和されたとはいわれるものの、一四代のうち一〇代までが養子相続といふ下妻藩においては、あわや「御家断絶」というスリリングな危機も何度かあったことであろう。以下に、その代表的な例として、正信から正兼への相続の経緯を見てみよう。

2 農民騷動

江戸時代には数多くの凶作・飢饉が農村を襲った。とりわけ享保・天明・天保の大飢饉は、農村の荒廃化現象に拍車をかけた。たび重なる天災と、重い年貢にあえぐ農民たちは、年貢の減免を要求したり、村役人層の不正を追求したりして、一揆・騒動をおこすことがたびたびであった。それは、享保期ごろからみえはじめ、江戸時代の後半になると、各地で頻発するようになつた。とりわけ幕末にはその数が激増し、やがて「世直し」と呼ばれる一揆・騒動へと発展していく。

下妻地方ではこのような一揆・騒動が、どのくらい起っているのであるか。現存する史料で、一揆・騒動に関するものは、極めて少ない。この種の記録は、比較的残りに多くいるものであるが、それにしてもほとんど見当らない。天明三年の騒ぎについては前述のとおりであるが、上の写真の史料は、慶応三年（一八六七）三月の、打こわしに関するものである。これによると西当郷村の酒造屋近江屋が、酒造商の制限を超過して、酒を仕込んでしまったことから、南当郷村の農民達が、近江屋に押しかけて、いって乱紛したという趣意である。騒ぎの大きさ等については、詳細にはわからないが、頭取六人が役所に召出され、一時入牢を申付けられていた。近江屋は米穀不足で高値の折に、酒造量を超過した罰として、三町四町（旧町内）困窮人へ米安売をすることとなつたが、近江屋だけの金額では、とうてい困窮人を救うのには不足であった。そこで騒ぎを鎮めるため、富裕な城廻村の名主九兵衛外、年寄三名の者が、一〇八両の金を出し合って、米一人前四合宛を村毎に安売りすることで落着した。近江屋と九兵衛たちは、何らかの關係があつたものと思われるが、いずれにしても富裕な者に対する打こわしの一例である。



（下略）

「内」の数は家の、○内」の数は下者井上氏の居主顕化を表す。名前の中の下の地名は月地(林村郷)、その下の数字は右高(甲斐千石)を表す。下堅町に属り、古くは坂年鑑を表す名で知られた。

井上氏系図

3 天狗騒動と下妻地方

元治元年（一八六四）三月、水戸藩内天狗派と呼ばれる者たちが、町奉行田丸福之衛門を中心に、筑波山に奉兵した。この中には、水戸藩の著名な学者藤田東湖の子小四郎や、下妻領木戸村名主飯田軍藏らがいた。彼らは長州藩と東西呼応して、尊攘の兵を挙げることによつて、幕府に攘夷を実行させることができると確信した。

筑波勢は初めその数も少なかつたが、次第に増えて千名を超えるほどになつた。幕府は関東諸藩に天狗党追討を命じ、常総の地が、天狗騒ぎにまき込まれることとなつた。

下妻藩は、下館、結城、土浦藩などと、幕命に従つた。そのうえ町内の多宝院には、幕府軍の本營があかれたから、天狗派の下妻攻撃は必ずであった。まず七月七日高道祖の原地で、筑波勢と幕府軍との衝突があり、筑波勢は逃げ帰つた。ところが八日夜三〇〇名余りの筑波勢が、高道祖の常顯寺を焼払つた。地理に明るい軍藏の別動隊が、多宝院へと迫つた。下妻藩では藩士一〇人、卒二〇人を出して坂本口を固めたが、筑波勢にはかなわなかつた。この戦死者が、上にのせた史料の四名である。

結局下妻は、追討軍の本營があつたことが災いして、焼打ちされることになつた。多宝院をはじめとして、陣屋まで焼失してしまつた。被害はこれだけでは済まなかつた。この後筑波へ呼び出されて、天狗派に金子を借り取られた者が三〇名近くには。たが、横瀬忠右衛門の二〇〇両をはじめ、町内からは外山、潮田、天満屋が一〇〇両、加賀の稻葉家、高道祖の吉原、笠島家などがそれぞれ金を出させられた。

昭和のはじめ横瀬夜雨が、「天狗騒ぎ」を著しているが、水戸藩内の抗争が下妻地方にあたえた影響は、ばかり知れないものがある。

飯田草蔵 元治元年、水戸藩天狗党の一隊が下妻を襲い、多宝院をはじめとして、田町、坂本、上宿等の民家へ火を放つて、焼打ちをした時の指揮者の一人に、飯田草蔵がいたことは、前述のとおりである。

草蔵は、隣の関城町大字木戸の名主の家の長子として生まれた。幼少のころから學問に志して、まず若柳村の石島嘉重の門に入り、ついで下妻藩の儒学者山本楳山の塾に通い、さらに江戸に出て安積良房にも学んだといふ。

彼はこれだけでは満足せず、弘化四年（一八四七）には、水戸領成沢村の加倉井砂山の塾に遊学することになった。この砂山塾は、水戸領内でも著名であり、多くの者が學んだところで、結城藩からも光岡多治見などが遊学するところであつた。草蔵はここで尊王攘夷思想に接し、大きな影響を受けたようである。一五歳の時帰郷して、村役についた。

元治元年三月、水戸藩天狗党の筑波勢とともに、藤田小四郎の參謀的存続として参加した。だがその彼も、下妻焼打ちについては、かなり良心の苛責に堪えかねるものがあつたようである。元治元年七月二十六日には、まず多宝院にて、金子と書狀を送つてゐる。その中で、多宝院を焼いたことについて、「報國の儀故」と御明らめ御解説下さい置かれ候はば戦死の期も安心此の上無き事に存じ奉り候」と述べてゐる。さらには同日、城廻村、東当郷村役人衆あてに、筑波町まで出向いてくれるよう、書面を出した。兩村の名主、組頭役四名が軍藏を訪ねると、彼は金二〇〇両をさし出して、先般の大難にあつた者への見舞金だと説明した。井上藩領木戸村の名主役をつとめ、かつ多宝院の檀家であつた軍藏としては、そのまま捨ておくわけにいかなかつたのである。

彼の記念碑は黒子の千妙寺境内に建つてゐる。